オーバーロード～遥かなる頂を目指して～裏劇場

作倉延世

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は作者の同作品

「オーバーロード～遥かなる頂を目指して～」

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／１７２１１３／

の裏側であったことをまとめた短編集となります。上記の作品を読んでいないと分かりづらいものでありますが、それでも良いという方だけどうぞお読みください。

なお、時系列などバラバラで基本的に１話完結方式です。が、シリーズもあるかもしれません。

それと作者の気晴らしも兼ねていますので、文字数も不安定です。２０００文字から９９９文字以下の時もあれば、本分以上の時もあるかもしれません。

目　次

会議とは荒れるものだ ―― 1
会議とは荒れるものだ① ―― 4
魔性属性その名は妹 ―― 9
ある姉妹の日課 ―― 13
与えられる物（幸せ）は ―― 18
大罪を背負いし者達① ―― 26
大罪を背負いし者達② ―― 30
大罪を背負いし者達③ ―― 34
大罪を背負いし者達④ ―― 38
大罪を背負いし者達⑤ ―― 42
少女はまだ知らない ―― 47
墳墓の休日① ―― 53
墳墓の休日② ―― 61
墳墓の休日③ ―― 66
赤毛の人狼メイド（ルプスレギナ・ベータ） ―― 71

会議とは荒れるものだ

ナザリック地下大墳墓第９階層の一室にて、６人の人物が集まっていた。いや、この表現は正確ではない。何故なら人など一人もいないのだから。

丸テーブルに椅子が６脚並べられ、その上には書類の束にティーセットと、これから何かしらの話し合いをするのは明らかであった。

「では、会議を始めましょうか」

そう口にしたのは煌びやかな純白のドレスを身に纏いし悪魔、額の角に頭から伸びるアホ毛、腰から生えた黒い翼さえ装飾品に見える守護者統括という地位に立つアルベドであった。

「ええ、進行は頼みますよ」

残りの５名を代表して言葉を返したのは、スーツ姿に腰からこちらはどう見ても既存のどの生態系にも当てはまらない尻尾を生やし、この集まりの中で唯一眼鏡を顔に掛けた悪魔、第７階層守護者デミウルゴスである。

残りの４人にしても個性的な装いでこの集まりにおける統一感というのは一切ない。

「では、まずはアインズ様の配置についてですが、冒険者として城塞都市エ・ランテルに向かって頂くというものでよろしいでしょうか？」

「異議なし」

「異議なぞあるはずがありません！」

「異議なしですね」

「異議なしだね」

「異議　なし」

「では、それで決定といたしましょう」

開幕すぐに可決する内容。それはかの方を思えば当たり前であり、その認識がこの場の者達に共有されていることを彼女は嬉しく思う。

「では、次ですが、アインズ様のお付きを誰にするか……」

「アルベドで決まりでしょう」

「シャルティアしかいないじゃないか」

自分の言葉を遮って、勝手に提案するのはモノクルを顔に掛けた男性と民族衣装に身を包む紫の瞳を持つ女性であった。両者は互いに睨みあい、こちらの存在を無視して勝手に言い争いを始める。
「てめえ、馬鹿じゃねえのか？」
「そっくりそのままお言葉をお返しします」
「アインズ様のお付きだったら。シャルが一番に決まってんだろ」
「アルベドが相応しい、それ以外にありますか？」
そこで、吸血鬼を推す女性は一度舌打ちをする。これ以上つづけても仕方ないと判断したらしい。
「一応、理由を聞こうかい？」
「ええ、良いでしょう」
彼はそこで一度、自分へと視線を向けてきた。その目は言っていた。
（任せなさい）
不安しかないのであるが、それは言えずに彼は続ける。
「先の件でアインズ様がアルベドを連れて行った件からも分かる通りその戦術的相性はとても高い。もっと言えば、お二方は相思相愛であらせられるんだよ？」
「兄さん!!」
「テメエ！　適当こいてんじゃねえぞ！」
思わず頬が熱くなる。確かに告白はしたが、あの方から返事はもらえていない。だというのに義兄であるこの人物はそうであると言い切ってみせたのだ。
（もう）
そう思うしかできないのである。その間にも彼らの争いは激しいものになっていた。
「ウィリニタス！　前々から思っていたが、テメエは危険だ！　アルベドが可哀そうだよ！　こんな頭のおかしい兄貴がいて！」
「それを言ったらシャルティア様こそ不憫に感じます。見た目だけ大人でその中身はちんちんくりんなあなたが先輩だという彼女こそ不幸でしょう？」

「殺すぞ！　六目フクロウ！」
「下ろしますよ？　羽根つきガエル？」
　このままでは本当に殺し合いになりそうである。ふと気づけば彼らと最も付き合いのある人物がこちらへと視線を投げかけていた。その目は一見、篝火のような不安定なものであるが、確かに謝罪の心があるものであった。
「ごめ　んね　アル　ベド　ちゃん　デミ　ウル　ゴス　くん　こいつら　すこし　いや　かなり　バカ　なんだ　」
　見ればデミウルゴスもその状況に何もできずにただ見ているだけであった。確かに彼らに何かをを強く言うのは難しいかもしれない。
　そこで扉が開けられる音が聞こえた。見てみれば居たのは階層守護者であるシャルティアであった。彼女は今にも殺し合いを始めそうな者達の内、女性へと声をかける。
「イブ、主（ぬし）、何をしてんすの？」
「シャル助」
「その呼び方はやめんし。ウィリニタスも２人共、大切な会議の場で何をしていんすの？」
　彼女はＮＰＣ達の中ではまごうことなく、最強の存在、その眼光にやっと落ち着きを取り戻したらしい２人はそれぞれの席につくのでった。
「シャルティア様に免じて、今日の所は見逃すとしましょう」
「て！　……分かったよ。アルベドとデミウルゴスも悪かったね」
「いえ」
「私たちの方はお気になさらず」
　会議とは荒れるものであると統括である彼女は吸血鬼に多少感謝しながら、会議を再開するのであった。

会議とは荒れるものだ①

大切な会議の場が余りにも阿保らしい（しかし当の2人にしてみれば、何よりも重要な事である）理由でお開きになりそうな危機が主に次いで墳墓最強である彼女のおかげで何とか納まり、また同じ事を繰り返さない為に彼女にも参加してもらう事となり、再開する事となった。

「では、改めまして」一度咳払いをして、アルベドが再度続ける。「アインズ様に付いてもらう者を決めるとしましょうか……」そこで、彼女は何か言いたげである義兄でもある彼に一度視線を向ける。どこか不安を抱えた光が灯っている。「……念の為に言っておきますが、私は墳墓に残り以降のナザリック運営の中心に立つつもりであります」

「アルベド、どうしてですか？」

当然の如く、彼女の言葉に食い掛るのはやや過保護気味な統括補佐であった。

「ウィリニタス様。お言葉ですが、彼女の適正ですとそれが最も良い配置であると、貴方だって理解出来ていますでしょう」

先は彼らのその余りの親馬……熱意に口を出すことも出来なかった為に、そうなってしまう為にデミウルゴスが先に言葉を発した。この人物だって分かっているはずなのだ。何故なら、彼は現統括アルベドが創造されるまで、この墳墓をまとめる立場であったし、この会議に参加しているのだって、相応の頭脳があると言う事が主を含めた墳墓の者達が認めているからである。

しかし――そんな後輩の思いを知らない彼は止まらない。

「墳墓の事であれば、僕が担当しておきますから」

「てめえ、いい加減にしな！」

口をはさむのは、当然の如く彼女であった。その様子に新たに会議の席に着き、今しがた声を上げた彼女の妹分でもある人物の目が徐々に険しくなり始める。いつでも戦闘態勢を取れるように手を空にかざして、その事に主の息子とも呼べるドッペルゲンガーは戦々恐々と

身を震わせる。その事は発言した彼女だって分かっているようであり、努めて冷静に彼へと説得を始める。
「良いかい？　私らで回していた時と今では、このナザリックだって大きく変わっているんだよ」
「そう　だね」
　彼女の言葉に同じ位この墳墓で多くの時を過ごした彼も口を開く。彼の声はいつも平坦であるが、その時の言葉はまるで昔を懐かしむような温かさがあり、珍しい事でもあった為に思わずその場の全員が彼の次の言葉を待った。
「懐か　しい　。　あの　頃、　まだ　第６　階層　まで　しか　なか　った」
「おお、素晴らしき墳墓の歴史。出来る事であれば、私も聞きたくあります！」
　その言葉に真っ先に反応を示したのは、やはり彼であった。わざわざ立ち上がり胸に手をあて、もう片方の腕を高々と掲げるパフォーマンス付きであった。それは彼の性格もあるが一歩間違えれば再び殺伐となりそうであった空気を少しでも和らげようと思っての事であったのだろう。彼はそういう奴だ。
（ありがとう。パンドラズ・アクター）
　アルベドは彼に感謝しながらも、己もまた自分に甘すぎる義兄に説得を試みる。
「兄さんが優秀であるのは知っていますし、私の代わりが務まるのも兄さんだけだと思っています……ですが、イブ・リムス様が仰る通り、兄さん達が現役だった頃と今では全く違うものでもあると言うのも確かなんです」
　実際彼女の言う通りであった。ナザリック地下大墳墓。元は、ユグドラシルと呼ばれる世界の1ダンジョンでしかなかったここは、主を始めとした至高の方々の手で大きく姿を変えている。トラップの数は倍増どころの話ではないし、僕の数だってそうだ。それらを完璧に管理出来るのは、現役である彼女にまた防衛責任者である彼位であると彼女は訴える。その言葉をウィリニタスは静かに聞いており、そし

て彼女は畳みかける。
「兄さんの気持ちは素直に言えば嬉しいものです。私だって出来る事であれば、アインズ様の御傍にいつでもいたい……ですが、それ以上に此処を守りたいという思いもあるのです」
　それもまた彼女の本心であった。この墳墓は愛する主の宝であるのだから。その言葉に彼は感極まったようで手を顔に当てている。その頬には涙が流れており、まるで我が子の成長を喜ぶ親のようでもあった。
「アルベド、立派になりましたね。妻だって喜んでいる事でしょう」彼はハンカチを取り出して頬を拭う。「分かりました。貴方がそこまでいうのであれば、僕からはもう何もありませんよ」
「何とか納まったようだね、本当に手がかかる奴だよ」
　呆れたように息を吐くのはイブ・リムスであった。彼女は本来の姿に似合わず、墳墓では2番目に最年長の部類に入る。シャルティアが数百年単位で生きているのに対して彼女は数千年単位であるのだから。そして、彼女は新たに参加というより、会議の御目付役として参加している妹分へと問いかける。それは、分かりきっていると言うのに、それでも念の為に聞いておきたくて言葉にしたという感じであった。
「シャル助、あんたはどうすんだい？」
「決まっていんす。私も辞退させてもらいんす」
　その言葉に彼女の性格をよく知る者達は驚きを胸に抱いた。無論、誰一人顔には出さないが……元より表情がない者達も交じっているけど。
「シャルティア、一応理由を聞いても良いかな？　私が知る君であれば迷いなくアインズ様について行くはずでしたので」
　代表して問いかけるのはデミウルゴスであり、彼にしては珍しく疑問を孕んだ非常に珍しい表情をしている。他の者達も彼同様に彼女へと視線を向ける。その事に内心辟易としながらも、シャルティアは己なりの思いを言う。
「今の私がアインズ様と共に行ったとしても、役に立てそうにありん

せん。で、あらば、別の所で事に当たるのが最も合理的でありんしょう」そこで、彼女は一度視線を落とす。しょんぼりとした子供を連想させる。「けど、私はどうすれば良いのかさっぱりでありんす。だから、主たちに頼みんす」

自分の配置はと締めくくり彼女は緊張していたのか、予め用意されていたカップへと手を伸ばす。

「はあ、そう言う事なら仕方ないさね」

残念がるようにイブ・リムスはそう言う。出来る事であれば、この妹分を主の供にしたいと言うのも本当であったから。彼女の性癖は困ったものであり、その外見に似合わず同性であれば経験は豊富であり、それだけで頭が痛くなる。が、同時に主に対する思いが本物である事も確かであり、それは誰にも負けない物であるとイブ・リムス自身が断言できる事であったから。

「では、アインズ様の供は……」

「ならば、私が立候補いたしましょう！」

再び会議が振り出しに戻り、話し合いに入るべき口を開きかけたアルベドの声はそれを塗り替える程に大きい声によってかき消された。

「パン　ドラ　ズ・ア　クタ　ー君」

一同を代表してプラネリアが彼の名を呼ぶ。出来る事であれば、おかしな事を口にしないでくれとその場全員が思っていたから。それを知ってか、知らずか彼は自分を売り出し始める。

「私であれば、創造主の事を誰よりも理解していると！」彼は、椅子を立つと片足を椅子にかけ、軍帽に右手を置き顔をやや下に傾ける。悲壮感を演出するつもりであったかもしれないが、意味は全く分からない。ついでに言えば、言動とも合っていないように思える。「自信があります！」今度は両手を広げ、胸をそらす。同時に椅子の上へと立つ。空から落ちて来た少女を抱きしめる前動作のようだ。「それに！

私の能力であれば、どのような事でも可能です！　文字通り我が創造主の助けとなってみせましょう！」椅子を飛び降り、外に広いた右腕を胸の前にもってきて、左手で軍服の裾を軽くつまみお辞儀をしてみせる。

「何卒、私パンドラズ・アクターにお任せを！」
彼としては、完璧に決めたつもりであるらしいが。
「却下よ」「却下ですね」「きゃ　っか」「却下だね」
４人が否定して、残った統括補佐が謝罪する。ちなみに、シャルティアは口を開けて固まったままだ。
「パンドラズ・アクター様。非常に申し訳ないのですが、貴方様には別の事をやって頂きたくあります」
「何と！　確かに私であれば、他に回った方が創造主のお役に立てるという事ですか⁉　アルベド様、シャルティア様同様に！」
「ええ、そうなりますね」
言葉を返す統括補佐の声は先に義妹の覚悟を聞いて涙ぐんだ時とは全く声音が異なっていた。確かにそれもある。しかし……
（何なのかしらね）
（上手く言葉には出来ませんが）
（特に　心　当たり　が　あった　訳　では　ない　けど）
（別にあんたを信用していないという事ではないさ）
それでも、何だか不安が生まれてしまい。彼の発案を否決にする事にした墳墓の知恵者達であった。
偉大なる支配者のお供が決まるのはまだまだ先のようだ。

魔性属性その名は妹

エンリ・エモットはその2人を前にして、違和感を抱いていた。目前にいるのは、現在自分の使用人となっている彼女の妹たちであるという。片目を何かで覆っている者と、どこか作り物めいた顔を持つ少女たちであったが、やはりこの世のものとは思えない美しさを持つ者たちでもある。それにしても、

（何だろう？）

何だか悪寒を感じるのであった。

（この娘達は……）

ルプスレギナにしては大変珍しく、本当に珍しく焦りを感じていた。その2人の妹、シズとエントマが目の前にいる姉妹に抱いている感情が分かるからだ。

それは殺意交じりの嫉妬。

（まったく）

珍しく駄々をこねるので、何とかあちらこちらに頭を下げ、かの主にも許可を貰い、この場を設けた訳であるのに。特にシズはその事情からすごく苦労したのだ。それでこれでは何とも言えない。が、彼女たちの気持ちも分からないものではない。

双子の守護者達もそうであるが、墳墓に所属する者たちで特に年少の者達、彼女たちにとって、アインズ・ウール・ゴウンとは仕えるべき主であるが、同時に親代わりのようなものでもあるのだ。

さて、そんな主がこの世界での足掛かりとする為にある姉妹の後見人になったのは有名な話である。自分に姉、アルベドを始めとした者達などはその決定をむしろ喜ばしく思ったものだ。なんせ、他の至高の方々がいないと分かっている以上。ほかに繋がりをもってもらうのはきっとその御心にとって穏やかなものであると断言できるからだ。

それだけではない、これまで自分たちを護る為に自らのすべてを抑えてきた御方が自ら何かを求めてくれるのは間違いなく良い傾向で

ある。
だが、これはいわば大人の喜びとも言えよう。面白く思わない者達もいたのだ。その筆頭がまさか、妹たちとは思いもしなかったが。
（本当にお子様なんだから）
最初は単に主の養子たる姉妹に興味があるということであったが、今、確信した。彼女たちは自分たちでこの姉妹を見定めに来たのだ。
『アインズ様の養子に相応しいのか？』
と、それこそ主の決定に意を唱える愚かな行為でもあるというのに。
（私も姉ね）
何とかこの場を丸く納めたいと思ってしまう。これで自分が姉に殴られるのは良いが、この妹たちが同様の目にあうのはあまりにも可哀そうであるからだ。
確かに不敬であるが、それはこの娘たちがそれだけ主を慕っている事でもあるし、先日の件でお褒めの言葉を貰った時の喜んだ顔は中々忘れる事はできない。しかし、どうしたものか？
（お嬢様達の方は……何とか気づかれてはいないわね）
これは妹たちの最後の良心とも言うべきか、その殺気は何とか抑えてあるようであった。だからといって、このまま放置するのはまずい。
そんな彼女の葛藤を止めたのは無邪気な声であった。
「かっこいい!!」
姉妹の妹であるネムだ。その一声に僅かであるが、妹たちの殺意が和らぐ。
「すごくすご～くかっこいい!!」
「……そう？」
「そうですかぁ？」
「うん!!」
「ネムったら」
（これは？）
具体的にどこか褒められた訳ではないと言いうのに２人は嬉しそ

うにしている。すごく単純だ。
「……それなら」
「これはどうですかぁ？」
２人はいつかの訓練の時に見せたように銃火器と札を出して見せる。それにネムの視線は釘付けであった。エントマが札を１０枚程適当に投げてみせて、それをシズが打ち抜く。打ち抜かれた札が軽く炸裂して色鮮やかな光を放つ。２人が共同で作った簡易式花火だ。
それに見とれるエンリにはしゃぐネムの姿があった。
「ごめんす。エンちゃん、改めて紹介するっす。こっち妹のシーちゃんとエンちゃん、ほら２人とも挨拶するっす」
「……シズ・デルタ」
「エントマ・ヴァシリッサ・ゼータと言いますぅ」
礼儀作法で言えば、間違いなく落第点であり姉であれば怒るだろうが、自分はそこまで厳しくするつもりはない。
「えっと、その……」
「ネム？　どうしたの？　すいません挨拶が遅れてしまって」
「大丈夫っすよ！　こっちはエンちゃん達のことは共有しているっすから」
「そう、ですよね。ネム？　本当にどうしたの？」
そこで、その少女は妹たちに迷うように視線を向けてようやくその言葉を口にした。
「お姉ちゃんて呼んでもいい？」
「!!!」
ルプスレギナは確信した。完全に落ちたと。
「……うん、良い」
「良いですよぉ」
「ありがとう‼　シズお姉ちゃん！　エントマお姉ちゃん！」
「!!!」
「あの、良いんですか？」
「別に問題ないっすよ～」
ルプスレギナは手を軽く振りながら、問題ないとエンリへと伝え

る。
（流石ネーちゃんっす！）
特に心配することはないと彼女はその少女へと感謝する。これも一つの武器であろう。属性という名の。
無邪気なネムのお陰で特に問題なく時間は過ぎるのであった。

ある姉妹の日課

ナーベラル・ガンマは墳墓において、かなり忙しい部類に入ると思う。なんせ、外での活動時は、冒険者ナーベとして動き、墳墓においても戦闘メイド、戦闘は殆んどない為、メイド、ナーベラルとして働く日々だ。しかし、彼女に不満はない。なんせ、外の活動は愛する主と共にやる仕事の為、無論それだけではないが。どうしても感情の高ぶりを抑える事は難しかった。

（ソリュシャンには悪いわね）

彼女の名前、姉妹では同じ3女として創造され、別に同じ母親から生まれた訳でないが、双子のように仲の良い人物だ。そんな彼女の名前が出るという事はナーベラルもまたソリュシャンが自分と同じように主たる、アインズ・ウール・ゴウンへと想いを寄せていると知ったのである。

それも自分と同じように異変後にて、主からかけられた何気ない言葉が切っ掛けでその気持ちが芽生えただとか。

（……？）

それを考えて、自分の胸が苦しく、いや何だか悲しさと同時に軽い怒りを覚えた感覚を味わい。彼女は困惑する。これは何なのか？と、それから彼女はしばらく考えてみる。そして、思い当たる。しかし、それは同時に自己嫌悪するものであった。

（私、何て酷い事を）

それは、主に対する不満であった。主の優しさというのは本当に魅力だ。自分たちへの詫びとして、命を絶とうとしたのもそうであるが。かの主は滅多な事では自分たちをお叱りにならない。かといって、それに甘えるなんてしてはいけない事だと常に肝に銘じている。

（アインズ様は、……絶対の御方ではない）

それは、臣下としてはそして、偉大なる方々に創造されたＮＰＣ身としては間違っているだろう。しかし、ここ最近。あの戦争の頃からも分かる通り、主もまた、弱さを抱えているのだ。それを考えると同時に恐ろしくなる。仮にだ、「夜空の会談」の件がなければ、自分たちは

アインズ・ウール・ゴウンは完璧なる支配者であると勘違いをしたままとなっていたはずだ。
　そうなった時、主はどうするか？　容易に想像できる。きっと自分たちの期待を裏切らない為に、必死に支配者像を演じようとしたことだろう。しかし、そうなった時、主の心はどうすればいい？　本当に心を許せる者がいない中で無理を続けてはいつかは。
（私たちが、アインズ様の御心を――）
　殺していたかもしれないと思えば、例え不幸な出来事であっても良かったと言うべきかもしれない。勿論口には出来ないが。
　さて、そんな主に対して抱いたのは不満であった。確かに優しい方だ。しかし、その優しさを誰にも向けるのには少し思ってしまう。もっと言えば、自分だけにそれを向けて欲しいとさえ、一瞬思ってしまったのだから。そこで、彼女は自分の頬を両手で叩く。そこは綺麗な紅葉痕となった。
（気を引き締めなさい。ナーベラル・ガンマ）
　自分の気持ちが許されているのは、アルベドの優しさもあるし、何よりもそう思うのは主の心の在り方を否定するものだ。あの方はきっと助けを求められれば、それに応じるだろう。断言できる。だって、そうだ。
　カルネ村の件。
　ンフィーレア・バレアレの件。
　主は人を助けて来た。本人は打算ありきだと言うけど、絶対そうではないと、自分は言える。それは主が生来持つ優しき強さだ。　しかし、それは同時に脆さも抱えているような気がどこかでするのだ。だからこそ、自分は主の傍に居続けよう。
（盾ではない）
　本当の臣下として、最後まで主と共に、そして許されるのであれば、いつか自分が見た光景を叶えたいとも思っている。何はともあれ、まずは目の前の仕事からだ。
（――よし）
　彼女は必要な道具――今回は箒であったり、はたきに雑巾だ――を

纏めると仕事に向かうのであった。その頃には頬の痕は綺麗に消えていた。

彼女は扉の前で立ち尽くしていた。その部屋は自身にとっても大切な部屋。そう、主の自室だ。本来であれば、一般メイドの受け持ちであるが、担当の者が変わってくれたのである。それもメイド長の許可を貰った上でだ。感謝すると同時に顔が熱くなる。世の中、ただなんて事はない。条件を提示された。その内容を思い出す。

「アインズ様と何かあったら、包み隠さず全部話してくださいね！あ、勿論対象年齢１８歳以上の話もですからね！」

嬉々として自分にそう告げて来たのだ。後半に関して、アルファベット一文字を使わなかったのは彼女なりに気を遣ったのだろう。それは、そうと思う。

（私の仕事を何だと思っているのかしら？）

これは、個人的に付き合いがある。というか、やや気があうメイド、インクリメントから聞いたのだ。

この両者の共通点として上げられるのは、「２人とも静かに過ごすのが好き」と言った所か、方やお茶、方や読書をそれも無言でやるのが趣味と言うのだから。

彼女の話によれば、どうにも一般メイド、あくまで一部ではあるが、自分が現地で主の相手、それも夜のをやっているなんて噂が立ってしまっているらしい。別に騒ぐことでもない為、放置しているが。余りにも酷いようであれば、姉を通してメイド長に伝えるしかあるまい。ともあれ、と考えて改めて最愛の御方の部屋へと入室しようとした彼女の動きを止めたのは無機質なそれでいて、何の抑揚もない声。それも少女の声だ。

「……ナーベラル」

こんな呼び方、もっと言えば話し方をする人物を自分は1人しか知らない。振り向けば、やはりそうであった。

「どうしたのシズ？　あなたの仕事は？」

「……今は、休憩中」

そう、妹であるシーゼット二イチ二ハチ・デルタ、愛称シズである。
「そうなのね、私はこれからアインズ様のお部屋の掃除をしなくてはいけないの。悪いけど相手は出来ないわ」
そう言って、立ち去るよう促すナーベラル。しかし、シズはそれに従わず言葉を吐き続ける。
「……ナーベラル、ナーベラル、ナーベラル」
同時に、何かを訴えるように彼女を見据える。それを見た彼女は何か思い当たったのか、諦めたようにため息を吐き、右手を妹の頭に乗せ、優しく撫でてやる。瞬間、無表情であるはずのシズの顔に笑顔が浮かんだように錯覚するが、それも一瞬だ。
「本当に、貴方は大人の女性じゃなかったのかしら?」
意地の悪い言い方だと自覚はあった。この妹は普段、子供扱いを受けるのを嫌がるのだ。それに対して、シズは変わらない様相で返す。
「……私は大人、でも、ナーベラルの妹」
「本当に仕方ない子ね」
いったい、いつからこうなってしまったのか? いや、原因は分かっている。長姉が次姉を折檻している最中の時に撫でた時からこうである。それから、この妹は自分と会うたびにねだるようになってしまった。甘やかすのはよくない。しかし、嬉しそうな妹の顔(あくまで表情はいつもと変わらない)を見てしまうとついついやってしまうのだ。
「……ナーベラルの手、冷たくて気持ちが良い」
「そう」
その言葉に少し気分が下がる。それでは自分は冷たい冷酷非道な女ではないかと。
(いいえ、それも間違っていないわね)
自分の事は自分が一番分かっている。もしも主が例の計画を上げなければ、自分は唯人間を殺していたであろう。それこそ何の感情も、葛藤もなく。極悪非道。それもナーベラル・ガンマの一部なのだ。
そう考えている彼女の耳に妹の言葉が続く。
「……本で読んだ。手が冷たい人は、心が温かい、だって。ナーベ

ラルにピッタリだと思う」
「そう」
その言葉に彼女は少し微笑みながら、シズをなで続ける。その光景を遠目に見た一般メイド達が「レアよ！　すごくレア！　今すぐスケッチの用意を！」と騒ぎ出す気持ちが理解できる位、その光景は穏やかで、温かいものだった。

与えられる物（幸せ）は

ナザリック地下大墳墓第９階層のある一室、そこにアインズとアルベドは来ていた。その目の前に広がるのは乱雑に積み上げられた物品の品々であり、それを見た墳墓の支配者はため息をつく。本来、組織の長がその所属の者の前でとる態度としては、非常に問題があるかもしれないが、少なくとも彼には、この行為で自分の隣に控えている女性が落胆することはないだろうという確かな信頼があった。

「また、これはな」

「随分、出てきましたね。モモンガ様」

アルベドにも愛する主がため息をつきたくなる気持ちは理解出来ていた。余りにもこの部屋がこうした状態になる速度が速いのである。彼女の記憶によれば、最後にこの部屋の整理をしたのは一昨日の事であった。その時に綺麗にそれもまだ未使用であるかのように全てを片したというのに、これである。

それならば、一般メイド達に任せればいいのでは？　という話になるが、そういう訳にはいかない事情がある。まず、この品々はかつて主が、そして至高の４１人が暮らされている〈リアル〉の品物であり、それを知ってしまったとなって腰がひけてしまう者達が続出してしまったのだ。心優しき主はお許しになっているが、個人的にものを言うのであれば、情けないという感情が先に来てしまう。至高の方々が関わっていると、その恐れ多いと思ってしまう気持ちは理解出来る。しかし、いつまでもそれではよくない。その至高の方々が残された知識に触れて行かなければならない時はこの先出て来るであろう。

『自分たちはかの方々の下にあるべき』

この考えも変えていかなくてはならない。

（ま、彼女に任せるしかないわね）

一般メイド達に関してはメイド長に一任している。彼女が優秀である事は自分も知っている事であるので、それ以上考えても仕方あるまい。

更に理由を上げるのであれば、と思考を続ける彼女の耳に愛する主の声が届く。が、それはあまり喜べないもの。疲れ果てたような声であったから。

「こんなのも出てくるしな」

そんな主の手にあるのは、数枚の紙が重なったような品、その知識も得ている。雑誌と呼ばれるものであったはずだ。

（……）

胸の鼓動が早まる。それは雑誌の表紙が原因である。そこにあるのは、1人の女性の写真。それも下着なのか水着なのか（これらの知識も彼女は持っている）判断に困る布のみを身に付け、むき出しになった肢体を強調するような姿勢をとっているものだ。

そこまで見て取れればその雑誌がどういった内容の物であるか、想像もつくというもの。これが、主自ら、それに自分を始めとした数人しかこの部屋の整理をしない理由だ。

主にしてみれば、そういった品々は自らの汚点であるとして、余り自分たちに触れさせたくないという事であった。

しかし、それらは今の彼女には関係がなかった。彼女が気になっているのは、主の視線に写真とは言え、他の女が映っている事である。

（モモンガ様）

今でこそ、かの方はオーバーロードと呼ばれる異形であるが、元は人間だったという話もある。そして、そう考えた時、どうしてもある不安が心をよぎるのだ。

（やっぱり、人間の女性の方が）

良いのではないか？　というもの。主の幸せを願うのであれば、その御心のままに振舞って頂き、その上で自分はそれに付き従う。それが正しいことだとは重々承知している。それでも、この方への想いは正真正銘自分のものであり、それを大切にしたいとも思っている。

それは、彼女が自らの主を心から愛してるからこそ抱く苦悩というものだ。主が決めたことであれば、潔く身を引くべきというという理想と、それでも自分がこの方の正妻となりたいという理想のせめぎあい。自己矛盾に内心苦しみながら、それを顔に出さないよう注意して

彼女は主へと声を掛ける。
「あの、モモンガ様？」
「どうした、アルベド？」
　彼女にしては珍しい力ない声に振り向いたアインズもまた心が痛むのを感じた。
　そう、彼女は必死に表に出さないようにしていたが、それでも彼には彼女が心で涙を流していると分かる程に、顔は歪んでいたのである。
「あ、あの」彼女は胸に手をあてて、続ける。「やはり、そう言った女性の方がモモンガ様の好みなのでしょうか？」
「……」
　それを聞いたアインズは呆れると同時に考えていた。そもそも自分はオーバーロード、骨だけの存在であり、性欲とは無関係な存在となってしまったのである。それと、更に言うのであれば、この墳墓にいる女性たちは基本的に水準が高く、それに比べるとかつていた世界とでは、正に天と地程の差があるのだ。
（俺のこの考えも無茶苦茶だな）
　そもそもこの話は2次元と3次元を、創作物と現実を比べるようなものであり真面目に考えるのは余りにも滑稽だと思う。しかしながら、この事を話したとしても彼女は納得しないだろう。それに、と彼は思う。アルベドは守るべき者達の1人であり、それ以上でも以下でもない存在。そう、そのはずである。だというのに、確かにあるのだ。
（……糞が）
　彼女がそんな顔をしている事に苛立っている自分がいるのも確かだ。これは、別に彼女を異性として見ているのではない。子供が泣いている姿に怒りを燃やす親のものであると、必死に取り繕いながら彼は彼女へと続ける。笑っていて欲しいのだと伝える。
「アルベド、今の私にはその余裕はないし、この際だから言っておくが、お前ほどの女性者が傍で仕えているというのに、他に目がいくとでも思うか？」
「モモンガ様……」彼女は無意識ながらに涙をこぼし、彼へと抱き着い

た。「ああ、モモンガ様、愛しております。モモンガ様」
「……アルベド」
縋るような彼女の姿にアインズは押し返す事が出来なかった。この行為は許されるものではない。と、分かっていながら彼もまた手に持った物を1度放り捨てて彼女を抱きしめ返す。
「あの、モモンガ様」彼女は自分が酷い事をしていると自覚した上で言葉を続ける。「しばらく、このままでいさせてくれませんか？　私にはモモンガ様の熱が不足しております」そのまま彼女はアインズの肋骨に自分の頭を押し当てる。自らの存在を彼へと少しでも刻みたいとそうしているようであった。
「許す……そう言う事であれば、仕方あるまい」
アインズにしたって、彼女のその言葉に便乗する事でこの状況を少しでも伸ばしたかったのか、あるいは彼女の願いだというかつての友への言い訳が欲しかったのか自分でもよく分かっていないのにそう返していたのだ。それでも彼は思う。
（暖かいな）
彼女との抱擁はどこか心地が良いと。
客観的に見れば、大の大人2人が抱き合っているだけの光景であり、少しませた中学生カップル等が見れば、「大人なのにその程度しか進んでいないの？」と馬鹿にしそうなものでもあったが、その2人にとってはなによりも大切な時間である事は確かであった。
しばらく抱き合った2人は部屋の整理を始める。ここから出て来る映像、文献問わず資料になるものは現在進めている計画の為に活用する為だ。アインズは無言である品を手に取ると、それを放り投げる。先の成人向け雑誌同様現在のナザリックにとって、不要な物と判断しての事だ。間違ってもアウラやマーレを始めとした年少の者達の目に触れさせる訳にはいかないと。
投げられたその品は綺麗に放物線を描くと、部屋の隅に置かれていた箱へと吸い込まれる。一連の流れは単にアインズのその手の技術ではなく、単に手馴れているという印象をうけるものであった。それだけ、彼がその手の物を見つけたということであり、それだけ出てき

ているという事情込みである。
（まったく、どんだけ出るんだよ）
そういった物を見つけて放り捨てる。それを1時間で何回も、多い時は何十回と投げているような気がする位には出て来るのだ。
そんな彼を悩ませる物品たちが眠る箱には「デミウルゴスＢＯＸ」とある。いや、それは正確ではない。デミウルゴスという文字に大きくバツ印がついており、その上から新たに別の紙が貼られていて、そこには「焼却」とある。つまり、正しくは「焼却ＢＯＸ」であるのだ。
これは文字通り、アインズが不要とした物を入れておく箱であった。名称に関してアインズが全て焼却――物によっては問題があるかもしれないが彼には関係なかった――処分を決めていた為に墳墓でも炎の使い手である、デミウルゴスを始めとした数名がそれを行うのであるが、結局墳墓に詰めている彼が最もその機会が多い為にその名前になったのだ。
それがどうして、変わっているかというと珍しくその悪魔から申し出があったのだ。
『アインズ様。大変不敬であると、承知の上でお願いいたします。その呼び方では私がそれらの品を希望しているかのようであり、少々心苦しくあります』
彼の言う事も最もであった為にその申し出を受け入れたのである。確かに担当者の名前をそのままというのは、余りにも安直であったとアインズもその時の事は反省していた。そんな彼の後ろからアルベドの声が聞こえて来る何か聞きたいような言葉であった。
「あの、モモンガ様？」
「どうした、アルベド？」
振り向いた彼の目に彼女とその手に持たれている冊子へと目がいった。
「これは、何でしょうか？」
彼女の知能であれば、直ぐに分かって然るべきかもしれないが、それでも聞いてしまうのは一種の期待からであったらしい。その目は宝物を見つけたと言わんばかりに輝いていたのだから。

「ああ……それはな」
　それは先ほど自分が手にしたものと似たように表紙に絵が描いてある。ひよこを模したらしき玩具が転がっていて、その傍で四つん這いになった赤ん坊がこちらへ向けて笑っている絵だ。その絵もすごくシンプルな物で、点で目を、線で口を描いており、髪の毛に至っては3本線で表現されている。そしてその表紙の最上部分には6文字の漢字が印刷されていた。
「母子健康手帳。いわゆる、母子手帳というものだろう」
「母子？　それは一体？」
　此処までくると、説明しない訳にはいかない。彼は自分の知る限りの知識をアルベドへと伝える。子供を身籠った女性がその子供とそして、母親となる自身の成長を記録していくものであると。それを聞いた彼女は懇願するように彼へと提案する。
「モモンガ様。お聞きしてもよろしいでしょうか？」
「何だ？」
「モモンガ様が家庭を持たれるとしたら、その、私とそうなったらと……」
（はあ?!）彼女の言葉の途中で内心絶叫する。本当に彼女は何を言っているのか？　と、彼女の言葉は続く。
「……仮定して少しお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「いや、アルベド。お前は何を言っている？」
「あくまで仮定でございます。それでも、いけませんか？」
「う、そうだな」
　アインズは迷った。彼女は仮定と言っている。つまりは、想像の域を出ないものであり、それさえ許さないというのはひどいではないだろうか？　と。
「分かった。それで、何を聞きたい？」
　結局、押し切られる形でその話に応じてしまう。
「もしもですね。私たちに子供が出来たとしまして、モモンガ様はどういった教育をされるのかと」
「そうだな」

仮定であっても、適当な事を言ってはいけないと彼は考える。もしも、子供が出来たとして、自分はどうするであろうかと。
「まず、そうだな。これは当たり前の事になると思うが、目一杯の愛情を注ぐと思う。具体的には、様々な物に触れる機会を設けてやる。今、思いつくのはそれ位になるかな」
「成程、それでは、やはり適切な者に指導にあたらせるのでございますか？　例えば、剣術でしたらコキュートスが喜んで申し出る事でございましょうし」
「何でそこであいつの名前が出て来るのかは分からないが、そうだな、確かに子供のやりたいことであれば、それを純粋に応援してやるのも親の努めだろうな、唯」
「唯？」
「子供の多様性は認めるべきだと思っている。例えば、私とお前の子供が男の子だとして、その子が裁縫に興味を示したら、お前は変に思うか？」
その言葉を受けて、彼女はしばし考えこむ。確かに、それは一般的な常識からは外れているとも言える。こんな考え方がある。「男の子が生まれたらサッカーを、女の子が生まれたらピアノを習わせる」この言葉もこの部屋で見つかった資料で見かけた言葉である。
アインズもまた、その言葉を見かけた訳であり、アルベドへとそう問いかけてみた訳であるけど、そこは彼なりの考えであった。その考え方はいわば、定まった概念に子供を押し付けているだけであり、子供を思ってのものと完全に呼ぶことは出来まい。
彼の脳裏に浮かぶのは母の姿。彼女は自分を養う為に、学校に行かせる為に働いて死んでいったのだ。結局自分は小卒という学歴しか得られなかったけど、それでも感謝すべきである。
（そうだよな）
ナザリックに所属する者達に当てはめても、現在、養子という事になっているあの姉妹にしてもやりたいことがあるのであれば、自分はその力になる。それが自分なりに出来る事であろうと、結論を出す。
「変に思いません。その子が在りたいと思う姿があるのであれば、

母として全力でそれを応援するのが勤めかと」
「ふ、そうか。その答えが聞ければ私は問題ないと思っている」
「いえ、モモンガ様。私からも1つあります」
「ん？　何だ」
　これは、本当に珍しいとアインズは思った。基本的にナザリックの者たちは自分の言う事を否定しないし、意見を言ったり等しないのだ。これは組織としては危ないと以前、ウィリニタスに聞いたのであるが、その時に彼は笑って答えたのだ。
『もしも、本当に危ないとあれば、しっかりと進言致します。安心してくださいませ、アインズ様は至高の御方でございます故』
　そう言うのであれば、自分は信じるしかない。そんな事もあって、ＮＰＣ達からこうして言葉を受けるのは嬉しく思うのであった。
「そうやって、子供の環境を整えるのも大切ですけど。やはり、私は先程のように触れ合いも大事であるかと考えます」
　彼女が言う事も最もであった。養子となった姉妹の妹や双子の階層守護者を思い出してもそうであるように単に与えるだけではないのだ。要はコミュニケーションの話になるらしいと彼は微笑み。
「そうだな、お前の言う通りだ。理想的な事を言えば、その子に疎まれる位の愛情を注ぐべきだな――と、そろそろ話を終えて、作業に戻らないか」
「はい、と、その前にこちらですが……」
　アインズには彼女が何を言おうとしているのか、察しがついた。彼女は先程から手にもっていた手帳を持つ手に少し力を入れると上目遣いで聞いてくる。
「……頂いてもよろしいでしょうか？」
「お前の普段の働きは理解している。それ位好きにしろ」
「ありがとうございます」
　例え、この先彼女がそれを使う事があっても、その相手は自分ではない。その時にはきっといい相手がいるのであろうと、どういう訳か痛むようである無いはずの心臓の鼓動を感じながら、アインズはアルベドの願いを叶えるのであった。

大罪を背負いし者達①

ナザリック地下大墳墓第９階層を移動する女性がいた。どうしてそんな言い方をするかというと、彼女は床に足をついて歩いているのではなく、無重力空間のスペースシャトル内を移動するように浮いていたからだ。しかし、それは別に魔法だとか、ここがそう言った場ではないというのは彼女の事を知っている者であれば、直ぐに分かること。

広げた黒い翼とくちばしのような装飾品を顔につけた女性。

彼女の名はレヴィアノール、第７階層守護者デミウルゴスが直属部隊「七罪真徒」の次席を務める人物だ。

本来飛行系の魔法を使えない彼女であるが、かといって、翼をはためかせる訳ではなく。まるで、宇宙を遊泳飛行する宇宙飛行士のような動きを見せている。それができる理由はいくつかある。まず彼女の場合、その翼を広げている所にある。といってもこれだけで上記のような動きをするには無理がある。次に彼女の職業だ。

ウェザーロード。

文字通り天候をある程度支配できるもので、彼女はそれで風をおこして飛行機の原理を再現する形で飛んでいる。が、これでもすべてではない。その割に風の勢いが弱いからだ。では、最後の要素は何かと言うと。彼女の右手中指にはめられている指輪にある。これもまたマジックアイテムであり、その効果は彼女自身の質量を１０００／１程までに落とすというもの。

これは、例えば５０kgであれば、０．０５kgまで落ち、そうなれば僅かな風で飛行できている事の説明もつくというもの。では、何故彼女は飛んでいるのか？それは大きく２つの理由があった。１つは彼女自身が単純に空を飛ぶのが好きだからというものであり、そこは鳥の本能と言うべきか、あるいはそれ以外から来ているかは彼女自身分かっていない。

次に彼女自身が心掛けてのものであった。彼女の種族はハーピィ、つまり硬質的な足をもっている訳であり、それでこの墳墓の第９、第

１０階層を歩こうものなら絨毯を引き裂いてしまいそうであるから、というもの。ならば、この階層に来ないで、自分の持ち場である第７階層からでなければ良い。なんて言うのは流石に彼女が気の毒である。そうでなくても仕事の関係上、どうしてもここに来る必要が出てくる訳であり、その都度訪れるものとしてはやっぱりそう考えるしかない。

しかし、現在の彼女は特に何か仕事をしている訳ではなく、唯遊覧飛行を楽しんでいた。それは、これから自分がやる仕事の重大さを理解しているからそ、気分転換がしたかったのかもしれない。

（やっぱり良いわ、こうして浮いている感覚……翼を持つ者の特権ね）

ふと、そんな彼女の耳に声が聞こえた。

『申し訳ございません、ユリ姉様。遅れてしまって』

『別に良いわよ、ナーベラル。まだ時間にはなっていないのだから』

『……後は、ソリュシャンとルプー』

『ですわぁ』

（???）

それは、彼女たちの部屋からであった。戦闘メイド、プレアデス。その姉妹たちに与えられた所だ。そこに全員が集まるらしい。何をするか直ぐに察しがつく。

（壮行会、てモノかしらね）

仲が良い事だと思うと同時に羨ましくなってくる。まるで、チームのようではないかと、そこで彼女は思いつく。自分たち、七罪も似たような催しが出来ないかと。

（あの面子……）

正直、彼女たち程仲良しとは言えないけど、それでも仲間のはずであると彼女は目的地を定め、飛行を続ける。

第７階層、そこは灼熱の大地とも呼ぶべき場所だ。常人であれば、ほぼ生存は不可能である。そんな中、彼女が訪れていたのは、地下洞窟とも呼ぶべき場所であった。

七罪真徒とは、階層守護者であるあの悪魔の直属部隊であると同時に領域守護者でもある。そんな自分たちが守っている地点というのは、ばらけており、その周囲も結構凝っていたりする。同時にそれぞれの自室も兼ねているからだ。

そして目的の人物がいるであろう所は、溶岩地帯だと言うのに、花が咲き乱れている所であった。それもすべて、特殊なもの、いわゆる魔性植物というものであろう。

その部屋、階段を下りた先の地下空間というのは変であるがそうとして言いようがないそこに来て、彼女は声をかける。

「リーダー、あたし達で壮行会やりませんか？」

「必要ありますか」

冷たく抑揚のない声、唯台本を棒読みしたような声が彼女の耳に届く。声の主はグリム・ローズ、自分たちの筆頭である人物だ。彼は現在、茨を使って器用に椅子を作り、そこで手に持った羊皮紙を確認しているようであった。嫌でも自分が彼を見上げる形になってしまう。

「いや、でも。プレアデスの皆はやっているみたいだし」

「彼女たちと私たちはまた違いますから」

全然、その気がないようであった。これは難航しそうだと思っていたら、続けて声が聞こえる。それは説教であった。

「レヴィアノール」「あなたは自分の立場をもっとよく理解しなさい」

「それでは大きな失態を演じますよ」

「大丈夫です。あたしの事はあたしが一番わかっていますから」

そうそう、大きな間違いはやらない。それは彼女自身の自信だ。そんな彼女の様子を見た、いや性格には感じた彼は少々言葉を強くする。それでも声音が変わっているという事はなかった。

「もしも何かあれば私はあなたを縛ります」

「どうぞどうぞ、その時はご自由に。絶対ありえませんから」

彼の腕に巻きついている茨が蛇のように蠢く、しかしそれを見ても彼女は全然怖くないと言わんばかりに軽くそれを言ってみせ、再度確認する。

「壮行会、や」

「必要ありません」「何度でも言いましょう必要ありません」「他にやる事があるでしょうに」
（これは、駄目ね）
「分かりました！」
まだ、全然言葉を言っていないのに全力の拒否を受けてしまい、彼女は諦めてその場を立ち去るのであった。

大罪を背負いし者達②

第7階層の空を彼女は飛行する。胸には不満が溢れていた。
(ほんと頭固いのよ!・セバス様にユリと良い勝負だわ)
筆頭である彼へのものだ。あんなに否定することないと言うのに。それでも彼女は諦めない。自分たちは7人だ、そして駄目のは今の所1人、自分も合わせてあと6人もいる。壮行会をやるには十分な人数だ。そして、次に声をかける目星もつけている。
(フェリだったら)
ある意味、七罪最年少の人物、精神性であれば未熟である彼女であれば、簡単に釣れるかもしれないと目論見、その場所を目指す。
そこは一言で言えば、墓地であった。と言ってもそれは一般的なそれではなかった。この墳墓の第1から、第3階層にあるものでもある墓地と言えば、墓石を思い浮かべるだろう。しかし、ここは違う。墓石ではなく、変わりに無数の武器、剣、槍、斧、杖、以外にも弓なども混ざって――それらが灼熱の大地に刺してあるのだ。その数も凄まじく、ざっと見た限りでも軽く千を超えている。
彼女が知る事ではないが、それもまたかつてのギルメン達による悪ふざけの賜物であった。この地はナザリック地下大墳墓に攻め込んだ者たちの墓場だと、そして戦士の墓場であれば、墓石は武器であると相場は決まっているというノリであったのだ。だが、彼女はそれを知らないし、別に今は必要ない知識でもあった。
彼女の記憶によれば、この墓地自体が仲間の1人の守護領域だ。あの子供は直属部隊所属であると同時にここの墓守も兼任している。もしも、墓泥棒等が出たら、それを討伐するのが仕事の1つだ。
(いたいた)
やはりそこにいた。無数の武器の中でひと際目立つ存在。まるで、この世界の巨人、それも人間が蟻程度の存在になってしまいそうな程の体躯を誇る種族が使っていたであろう巨大な剣、それを誰にでも分かるよう伝えるとしたら、ミッドタウン・タワー、54階層を誇り、248・1メートルの高さであるかつて、リアルに存在したであろう建

物と同じくらいと言えば良いだろうか？
　他と同じく大地に突き刺さっているその刀身に背中を預けて眠りこけている少女。声をかける予定の人物だ。
　彼女はその前に降り立ち、気楽に声をかける。
「フェリ～ちょっといい～？」
　声をかけて２０秒ほど、少女はその目をゆっくりと開き、その眼が目前の自分を捉えたと思うと、同時に嫌悪がその瞳に宿る。
「レヴィアノール、……何？めんどいのはやだ」
　明らかに不機嫌であった。どうやら彼女は休憩中のようであった。それを言ったら自分もそうであるけど、今は考えることではない。
「あたし達で壮行会やらない？」
「めんどい」
　一言の拒絶であった。いや、こいつに関しては予め予想できたことでもある。彼女は次の手段に出る。
「お菓子もいっぱい用意するわよ。それもベルガね」
「……」
　無言であったが、その言葉に反応する素振りが見れて満足感があった。フェリアネスとは、本当に子供っぽいと自分も思う。この少女は甘いものが好物なのであり、同時にそれを作るのが得意な同僚のお手製のものであれば、基本的に動きたがらない彼女が飛び出す位好物なのだ。
（よしよし、このまま）
「で、どうかしら？やりたいと思わない？壮行会？」
「……お菓子って本当？」
「あたしは嘘はつかないわよ」
　息をするよう偽りを口にする。実際彼が参加するかどうかはまだ未定であるからだ、それでもここでも今は関係ない。
「やっぱり良い。めんどいし、寝たい」
（あれ？）
　これはおかしい。彼女はそこで、話題を変えようと試みてみる。何かほかに方法はないかと思っての事だ。

「そう言えば、あんた、何抱きしめているの？」
「これ、人形」
「いや、それは見れば分かるから」
　彼女が抱いているのは、一目した限りでは２頭身であった。そこまで、身長が高くない少女の胸に収まっているので、そこそこ大きいと思われる。
　よく見れば、それは立派なローブを纏った骸骨でもあった。
（よく見なくてもアインズ様よね、あれ）
　それは、絶対の支配者であり、大恩ある人物である。そして、彼女の知る限りフェリアネスが何か抱いて眠るという事はなかったはずである。
「本当にどうしたの、それ？流石に気になるんだけど？」
「……眠れなくなった、あの時から」
（ああ、そういう事）
　大体の予想はついたが、少女の言葉に耳を傾ける。事は、主が自分たちへの罪滅ぼしとして自殺しようとした時からだという。確かにあの出来事は衝撃であったし、自分たちも相当落ち込んだものだ。
（確か）
　真っ先に立ち直ったのは、仕えている人物と個人的にも親しかった彼だ。落ち込んでいる暇はないと言っていたような気がする。
（それにしてもねえ、フェリが）
　まさか、その事をそこまで気にしていたというのは、驚きである。それも無理はないかもしれない。この少女だって、主の事を慕っている、それこそ親の様にだ。
「それで、アルベド様に相談したら……作ってくれた。それから眠れるようになった」
「そう、それは良かったじゃない」
（やっぱりアルベド様はお優しい方よね）
　守護者統括である彼女は慈愛の塊ではないかと自分は時々思う。それであるならば、彼女を応援すべきだろう。しかし、迷っていた。
（あいつの事もあるし。中々難しい問題だわ）

これから先の自分の立ち位置を決めかねるレヴィアノールであった。だが、それとは別に諦めていないこともある。今は何としても壮行会が先なのだ。

大罪を背負いし者達③

「それで、どう？　やらない？」
「何？」
　いきなりの話題転換に継ぎ接ぎだらけの体を持つ。戦闘メイド姉妹の長女よりもゾンビらしい体を持つ少女は唖然とした様子である。自分の話を終えれば、それで終わりだと思っていたのに目前の彼女は違うらしい。
「だから～壮行会」
　そう、彼女は諦めるつもりはない。これからの事を考えれば少しばかり馬鹿をやらないと気が持ちそうにないのだ。
「それって、リーダーの命令？」
　それを聞いて、彼女、レヴィアノールは少し不満を覚えた。自分のいう事は頑なに拒否するのにあの石頭のいう事には従うのかと。
（違うわね）
　それは、少女が純粋に仕事熱心であるという事でもある。これまで、何度か彼女と共に仕事をする機会があったが、その外見、普段の振る舞いと幼さが大分残っているように見えるのに、ひとたび切り替えれば、墳墓に所属する者として恥ずかしくない働きを見せるのだ。実際そうなった彼女は強く。近接戦闘であれば、自分たち（七罪）の中では2番目の実力を誇り、仮に今戦闘となったとすれば、自分の首は魔法を放つ間もなく少女の傍らに立てかけてある鎌によって刈り取られる事であろう。
「別にそうじゃないわよ」
「じゃあ、……聞く必要ない。仕事じゃないし」
　正論ではある。普段、彼女は己の役割をしっかりとこなしており、今はその合間にある貴重な休憩時間でもあるし、その間をどう過ごすのかは彼女の自由であるし、自分にどうこうする権利はない。それでも諦めるなんて事は出来ない。
「ねえ、良いでしょ？」
「……――くたばれ」

始まったと思う。そして同時にこうも考える。やっぱりこいつはまだ子供であると。この少女は不機嫌が頂点に達した時、必ずその言葉を口にするのであった。そこで、彼女は気になったことを言う。
「あんたのそれって、単純に『死ね』じゃ駄目なの？　別にそれを本気にする奴はこの墳墓にはいないわよ」
そう、少女は見た目こそゾンビであるが、その職業の１つに死神があるのだ。別に本気で言う訳ではないし、それ位言っても良いのではないか？　と、彼女は己も知らない内にかつてこの墳墓に居た者達の影響を強く受けて言うのであった。それに対して、少女は少し考えるように頭を左右に振って――無意識にやっている所からも分かる通り、これも彼女の癖、あるいはそうあれと創造された事かは分からないが――やがて、答える。
「駄目、って言われた」
「誰に？」
「チグリス・ユーフラテス様に」
至高の４１人の名前が出てしまえば、それ以上聞くのは不敬であろう。彼女は続ける。
「『死ね』は、駄目だって、でも『くたばれ』は良いって」
「そうなの、ならそうなんでしょ」
（死ねとくたばれって意味は一緒、よね？　何が違うのかしらねえ？）
しかし、至高の方がそう言うのであればそうなのだろうと彼女はひとまずその話を流す。
「壮行会やりましょ」
「くたばれ、くたばれ、くたばれ」
最早少女は話を聞くつもりはないようで、その単語を呪詛のようにその言葉を繰り返す。しかしながら、その姿は癇癪をおこした子供の物で彼女にはまったく効かない。苛立ちを覚えることも、不快感を抱くこともなかった。むしろ目前の少女が子供であると再認識させ、かすかであるけど安心を感じていた。
（こういう存在って結構貴重ね）
吐いている言葉は乱暴を通り越して良くない事であるが、それがか

えって微笑ましさを生んでいるようであった。しかし、次に少女が発した言葉には彼女も反応せずにはいられなかった。
「くたばれ、くたばれ、……――鳥頭」
「あんたねええ‼　いくら何でも言って良い事と悪い事があるわよ‼」
鳥頭。それは彼女にとっては禁句であった。こんな話がある。「鳥は3歩歩けば物を忘れる」というものだ。
そして彼女はハーピィであり、鳥の部分も多大にあるのだ。そんな彼女にとって、その言葉はやはり許せるものではない。しかし、彼女自身が一番分かっていた。自分は別にその言葉だけに怒りを感じている訳ではないと、その禁句自体は先ほど少女を釣る為に出した名前の同僚や何だったら、あの人狼メイドさえ、頻繁に言ってくるのだ。
（ベルウゥ！　ルプスウゥ！）
それを思い出すだけで彼らへの怒りと殺意が湧いてくるのだから、相当だ。その都度、わりかし本気の魔法を放っている。そうでもしないと彼らはやめない。彼らはその言葉の意味を分かって言っているのだ。
しかしながらこの少女は違う。はっきり言うが、彼女はあまり知識を持ち合わせていないし、本を読むこともしない。その点をあの石頭が戦闘メイドの長女に相談していたと思う。つまりだ、少女は意味合いを分かって悪意で言っているのではない。自分の見た目で、その印象で言っているのだ。
それが何よりも腹立たしく、彼女から冷静さを奪っていく。それを知ってか、知らずか少女の罵倒は続く。
「くったばれぇ～くったばれぇ～鳥頭～♪～。とっとと、くったばれぇ～、鳥頭～♪～」
その声は、歌詞が整っていれば、それこそ一流の歌い手、あるいはハープが織りなす音色のような歌声であった。が、何せ内容が内容であり、それを聞いている者もただ1人。それもその声に聞きほれている余裕などなく。
「あああ、もう分かったわよ‼」

彼女はそれだけ言うと飛び立ってしまう。このままここにいれば、感情に任せて少女と殺し合っていた事であろう。先にそうなれば、自身の負けを認めていた彼女であるが、実戦と想定はいつだって噛み合わない事が常である。かと言ってそんな事をすれば、他の者達に迷惑が掛かる訳であるし、何より恩人たる主が悲しむだろう。それは出来ないと去ったのである。

そんな彼女の葛藤をこの少女がどこまで察する事が出来たのかは不明であるが、飛んでいった彼女を見送った後、彼女は鼻を鳴らした。まるで、突然やって来た嵐がやっと去って行ったかと言いたげだ。それから大切な人形を抱きしめて再び眠りにつく、その夢は良い物だったらしく眠り顔は晴れやかなものであった。

大罪を背負いし者達④

少女の罵倒交じりの唄によってその場を離れた彼女は再び第7階層の空を駆ける。当然、その胸の内は彼女への不満で溢れていた。

（フェリのアホ！　阿保！　ド安保！）

やはり餓鬼はガキであったと、結論付ける。何にしても不味い、現在6人中2人が駄目であったのだから。

（まだ大丈夫よ！　まだ半分以上いるんだから）

やけくそ気味にそんな思考をする彼女は次に訪ねる予定の人物を誰にするか、考える。

（残っているのは）

脳裏に浮かぶのは4人、比較的仲が良いと言える青年に、性格の悪いクソガキ、アルベドと同じように仕えているデミウルゴス（主人）へと恋慕を抱く彼女に何を考えているかさっぱりな巨漢だ。

（誰から行くべきかしら？）

最も話に乗ってくれそうなのは彼である。ならば、先に引き込むべきであるか？　それとも後回しにして保険にするべきであるか？

（悩ましい所よね）

そう考えながら、飛行する彼女は無意識的に第7階層のそこへと飛行していた。彼女の下に広がるのは溶岩の海とも呼ぶべきものだ。

本来であれば、全ての生物が触れた途端に蒸発する地帯であるが、ここはナザリック地下大墳墓。そんな事は関係ないように泳ぎ回っている魚型のモンスター――当然、墳墓のシモベだ――姿もある。そして、彼女は忘れていた。この辺りは、同僚の1人の守護領域でもあると。

彼女の耳に乾いた音が届く。

（ん？　これって、銃声かしら）

銃と言えば、戦闘メイドの下の方にその専門職の娘がいたはずである。そこで彼女は思い浮かべる。

（は～ユリにルプスが羨ましい）

その娘の他にも蟲っ娘と彼女たちの妹たちは大変素直であり、そし

て良い子であるのだ。出来る事なら、フェリアネスと取り換えて欲しい物だと。
しかしながら、これは結局の所「隣の芝生は青く見える」という物であり、ユリだって同様の事を時折考えているとは夢にも思わないレヴィアノールであった。
そんな事に時間をかけたために対応が遅れたとも言える。音は大きくなっていた。
(???)
ようやく彼女もその事に違和感を抱く、空気を割く音。それは、何かが高速で宙を飛んでいるものであるのだ。
(!!!)
気づいた彼女は慌てて身をよじる。その傍を通過したのは、金属片、否、弾丸であった。その瞬間、彼女は全て理解した。いや、思い出したと言うべきであろう。あの良い子なメイドがこんなことをするはずがないのだ。
(あいつ！　いきなりぶっ放しやがったわね！)
これが、奴の仕業であればまだ終わりではない。耳に聞こえる空気を切り裂く音が変質していく、それは無理やり軌道を捻じ曲げているもの。
つまり――
そう考えた彼女は羽を羽ばたかせ、全力で飛行を行う。目に力を入れてみれば、先程飛んだ弾丸がまるで、アクロバット飛行のように上空でUターンしてみせているのだ。その狙いは言うまでもなく、自分だ。
(ロドニウス！)
この攻撃を仕掛けて来たのはそのクソガキ以外にいないだろう。
ロドニウス。
七罪真徒の1人であるが、彼には色々と困った所がある。本来であれば、この行為は許されないものであるが、彼には特別な事情があった。ある特権が与えられているから。
それは、裏切り者の粛清。

彼には墳墓を裏切る可能性のある者を判別して、そして攻撃する事が許されているのだ。だが、実際の所墳墓を裏切ろうなんて者は存在しない。現在攻撃を受けているのだって、何も自分が主に対して反意を持った訳ではない。実際彼はその為というか、相手の思考をある程度読めるという感情を読める自分以上にとんでもないスキルを持っているのだ。そして、此処までの自分の思考にそんな物はなかったはず。

（待って）

まったく無いとは言い切れなかった。先程自分は何を考えていた？　至高の方々がそうあれとされた事に対して不満を持ったではないか？

（待ちなさい！　悪いのはあたしじゃないわ！）

その事を考える前に銃声が響いたのである。ならば、あいつは問答無用で発砲した事になる。なんて奴だと彼女は思う。

（これも）

複雑に軌道を変え、自分へと迫る弾丸を避けながら彼女は考える。性格の悪さの原因を、何でも彼を創造したのは、今では唯一墳墓に残ってくださった慈悲深き主であるアインズ・ウール・ゴウン、モモンガも少し苦手に考えていた御方だと言うのだ。その御方もお隠れになって大分経つ為、もう詳しい事は分からない。それでも現在自分が厄介ごとに巻き込まれているのは確かである。

（仕方ないわね、やってやるわよ！）

ひとまずは自分を狙って飛び回る弾丸を何とかしなくてはならない。これは正当防衛であると、自分とこの事により口うるさくなる者たちへの言い訳を整えて、彼女は構える。その右手に透明な液体がまとわりつく、彼女はその持ち合わせている職業により、気温だって操ることは出来るのだ。

雨とは空気中の気体が熱によって、液体となったものが地上へと落下する自然現象である。よって、これ位の芸当は彼女にとっては朝飯前であるのだ。

彼女はその液体を鞭のように振ってみせると、自分へと迫っていた

弾丸を捉える。
（どんな物質でもね）
　水中であれば、その移動速度を落とす事が出来る。そもそもそれを想定して作られていないのだから。次に彼女はそれを自分の右手に持ってきて弾丸を握りしめる。そこまでしても暴れるのをやめないそれに苛立ちが募る。
（ホントにも～！）
　今度は右手の熱を上げる。天候を支配できるとは熱をも自在であるという事なのだから、弾丸と言えど、金属である事には変わりない。ならば溶かしてやると、もしも現実であれば彼女も蒸発する温度まで一気に上げる。やがて、振動は収まり手を開いてみれば、溶けた金属片だった液状のものが流れ落ちる。
「ロドニウス！　これ以上の攻撃はご法度よ！」
　すかさず彼女は叫ぶ、こうでもしないとすぐに次弾がくることを知っているからだ。その言葉が聞こえたのかは分からないが、銃声はしなかった。
（はあ）
　ため息をつきながらも彼女は降下する。困った奴ではあるが、あれでも一応、同僚の1人だ。声を掛けてみるべきであると判断しての事であった。

大罪を背負いし者達⑤

常人であれば、息すら出来ずに喉を焼かれる空間の中をレヴィアノールは風を操りながら降下を続ける。視線を下に向ければ、見えてくるのは灼熱の海とも呼ぶべき光景。真っ赤な液体とも固体とも呼べそうな溶岩。これが、本当の水であれば、多少中を伺う事が出来そうであるが、見えるのはただただ赤い光景であり、もしもあそこに飛び込めば永遠にこの世を離れる事が出来るだろうと容易に想像が出来てしまう。

（ヴぁ～～！　見ているだけで熱くなってくるわ）

脳の中にあるありとあらゆる液体が蒸発するのではないだろうかと思いながら、彼女は目的の人物を探す。溶岩地帯には、いくつか島のように陸地もあり、その人物は岩の上に事もなげに腰かけていた。

（いた。あんな所に――て、当たり前か）

少し考えれば直ぐに分かる事である。この辺りが彼にとっての守護領域であるのだから。彼は種族としての特性上、陸上での戦闘があまり得意ではない。彼を創造した至高の御方もその辺りが分かっているから彼の職業をそう定めたのであろう。

（それにしたって、あれはどうにかならないのかしら？）

岩、それだって相当な熱を持っているはずであるのに、その少年は涼し気にそこに座っている。やや高い所にいる為に足は地面についていない。左足はだらりと下げられており、曲げられた右膝に右腕を置いていて、その光景に彼女は内心で「このマセガキ……」と毒づく。

「あんたねえ、どういうつもり？」

彼女は、少年の右手に握られた拳銃を睨みながら問いかける。ナザリック地下大墳墓にて、銃を武器に使うのは2人だけだ。プレアデスのシズに、そして目前のロドニウス。彼女が両手持ちの銃なのに対して、少年、彼は片手持ちのものを使用している。それも弾丸の装填数は最大6発とやや心もとない数字である。以前、その事を聞いたら生意気な返答が返って来た。

『一発撃てば、必ず当たる。特に心配することはない。貴様の脳は大

丈夫なのか？　鳥頭？』
（思い出しただけで腹が立って来たわね）
　こいつもまた自分の特徴をそんな風に揶揄してくるのである。それでも、何とか取り乱さずに堪えるレヴィアノール。傍目に見れば、特に何も問題がないように見えるが、その胸の内はいつだって爆発しそうなものである。それを知ってか知らずか声をかけられた少年は彼女の方を見る事もせずに答える。
「別に大したことではない。目障りな鳥が見えたから撃ち落とそうとしただけだ」
「あんたね……」
　激しく心臓が脈打ち、脳を流れる血液すら沸騰する様であり、その熱さは周囲の溶岩にさえ負けないと何とか心を落ち着かせながら問いただす。
「前々から思っていたけど、他の奴らにはそんな事していないわよね？　あたし、あんたのせいで頭を下げるのは嫌よ」
　そう今回は自分が狙われたからいいもの、他の階層所属に者達に同様の事をすれば、大問題になるのは必然である。そうなった時まず責任を問われるのは、この階層守護者であるデミウルゴス。次に自分達のまとめ役であるグリム・ローズと言った所か、一応自分はこのグループの副リーダーという事になっているのでもしかしたら、頭を下げる事になるかもしれない。
（冗談じゃないわよ！）
　間違ってもお断りである。そうしていつでも堪忍袋が破れそうな彼女に少年は変わらない口調で返す。
「問題ない。自分が狙っているのは、この階層所属の者だけだ」
「ん？　それって、どういう意味かしら？」
「ふん、全く理解が遅くて腹が立つ」
　そう言って舌打ちをする少年にレヴィアノールは何とか怒りが爆発しそうなを抑えて問いかける。特に有効的な言葉を選んで。
「あのね？　言葉を交えないと伝わらないことだってあるし、アインズ様だってそうしろと仰るはずよ？」

彼女のその言葉に初めてロドニウスは反応を示す。彼女へと向けていた冷めた眼差しに初めて熱がこもったようにも見えるし、その姿は父親に反発しながらも認めてもらいたいと葛藤する少年のようでもあった。
「アインズ様が――か」
「ええ、そうよ」
彼女は好機とばかりに畳みかける。何かと問題行動が多い少年であるが、主に対する忠誠の姿勢としては自分達（七罪）では一番だと思っているし、それは石頭の彼やあの青年も認めている所だ。
主が名前を変えたのは有名な話であるし、主は自分達と近しい存在でありたいと名で呼んで欲しいと言ってくれたのだ。しかし、こいつはそれからしばらくしてもかの方を「アインズ・ウール・ゴウン様」と呼び続け、リーダーの折檻込みの説得でようやく呼び方を改めた程である。
「そうか、そうだな。分かった説明する」そう言って少年は岩を飛び降りる。その背は、当然と言うべきかレヴィアノールの方が高い為に少年が彼女を見上げる形となる。「流石の貴様も自分の存在意義というものは知っているだろう？」
「ええ勿論よ。裏切り者の粛清及び、その疑いがある者の尋問……だったかしら？」
彼女の言葉に少年は一度頷いて続ける。
「そうだ。そして自分の想定になるが、仮に墳墓から裏切り者が出るとすれば、間違いなくこの階層からだ」
「あんたね、滅多な事を言うんじゃないわよ」
少年の言葉を聞いた時、確かに彼女の中で憤怒の感情が湧いたと彼女自身は自覚していた。
（そんな訳ないじゃない）
確かに自分達を含めてこの階層に所属する者は変わり者が多いが、それでも主に対する忠誠は他の階層に負けないはずである。彼女にしては珍しく気落ちした訳であるが、それを分かってか分かっていないのかロドニウスは続ける。

「貴様だって、心当たりがない訳ではないだろう。例えば、あいつ等な」
「あんたね、仮にも上位者よ？」
「知るか」
　本当に生意気だと思ってしまう。自分でさえ、敬称をつけると言うのにこいつは彼に対してこの態度だ。何とか話題を変えるべく、というか変えないと自分の心臓が持たないと彼女は別の人物の名を上げる。
「裏切りの可能性だって言うんだったら、あいつはどうなるの？　エクレア・エクレール・エイクレヤーって言ったかしら？」
「ああ、あいつか……」
　話題に上がったのは、第９階層を中心に働いているペンギンの姿を持つ執事助手だ。彼は、至高の御方にそうあれと定められたのか、頻繁に「ナザリックを支配する」という言葉を吐いているのだ。最も、それを本気にしているのは……
（ヴぁ～～そう言えば）
　そんな事もあったわねと彼女は内心で頭を抱える。以前、先ほど自分へと罵倒を浴びせて来た少女が本気でそのペンギンを殺そうとして、何とか抑えたという記憶がある。
　少女にしてみれば、支配とは大切な主を殺してその座を奪うものであると思い込んでいたらしい。何とか、その場は収まったものの、少女はペンギンの妄言に腹を立てているのは変わりないので、そういったものであると教えなければならない。
（たく、世話がやけるんだから）
「訳が分からないんだ」
　そんな彼女の耳に戸惑ったような声が届く。見れば、少年は片手で頭を抱えていた。
「何よ？」
「だから訳が分からないと言っている」頭を抱える手に力を入れて彼は続ける。「あいつは謎だ。どうしたら?!　便器掃除が?!　墳墓の支配に繋がると言うんだ!!」

それは、彼女も初めて見るかもしれない少年の取り乱した姿であり、その言葉には少なからず同意出来てしまった。
（そうよね、丁寧な仕事をしてくれるのは確かに助かるわ。けれど）
他にもそのペンギンは自分が墳墓の頂に立てば、至上の待遇を約束してやると墳墓所属の者であれば、誰彼構わず声をかけているらしいが、そもそもそんな話に乗る者はいない。自分だってかけられた事はあるが、断っている。
（少なくとも）
言える事は一つ。ロドニウスにとっては、ペンギンよりも自分達の方が疑わしいと言った事であるという所か。
少し悲しいと本来の目的を忘れてしばし感傷に浸るレヴィアノールであった。

少女はまだ知らない

ナザリック地下大墳墓第５階層、大白球（スノーボールアース）。一見、スズメバチの巣をひっくり返したような、ドーム状の形をした建物、この階層の守護者が住む場所である。そして、その周囲にも似たような建物が連なっていた。異変よりの墳墓の方針として、かの武人の部下たちの住居も近い所にする事になったのである。

まるで、かまくらが並んだようなその村とも言えそうな場所が、現在の彼女の住居でもあった。

その一室で彼女は目を覚ます。

「〜〜〜」

本来であれば、睡眠など必要がないし、取ることも煩わしく思ってしまうけど、かの主、彼女にとっては、どこか父親のような人物でもあるアインズ・ウール・ゴウンの命令で、決まった時間帯に睡眠を取ることになっているのだ。

彼女は普段の装いからか、ベッドよりも布団で寝る事を好んだ。この階層はすべてが氷で出来ているといっても過言ではないけれど、そこはかの悪魔の開発した特別なものを使用している為、睡眠は十分にとれている。

彼女の肢体から掛布団に毛布が滑り落ちる。現れるのは常人が見れば、悲鳴を上げる事間違いない異形、それもどこか地球外生命体を思わせるものであるが、彼女がそれを気にする事はない。大切な御方がそうあれと定めた姿であるからだ。

（……）

それでも、不満を持ってしまう自分が嫌になってしまう。と、彼女は嘆息した。それから、少し部屋を歩き、棚の上に置いた瓶を手に取る。

そこにいるのは、ナメクジに口がくっついたような生き物であった。彼女は、それを手に取り、しばし見ると。自身の喉元に持ってくる。それから、少しいじった。

「はい、これで良いですわぁ」

彼女は自分の地の声が嫌いであった。故に、普段は先ほどの生き物を使ってその声を変えているのである。
それから、彼女は身支度を始める。いつも着用している仕事着に、顔にもいつも使用している仮面状の物を付けてみせた。その姿は、まさしく戦闘メイド姉妹の1人である、エントマ・ヴァシリッサ・ゼータであった。
ある程度の身支度を整えた彼女は次に戸棚を開けると、そこからトレイを出し、そこに乗ったクッキーを3枚程手にとると、簡易的な朝食を済ませる。
それから、姿見で自身の身なりを確認して、彼女は部屋を出た。
「これは、エントマ様ではないですか」
自らの住居を出た彼女を出迎えたのはまるで、妖怪雪女を思わせる姿をした雪女（フロスト・ヴァージン）郎と呼ばれるシモベであった。彼女はこの階層所属であり、普段はこの辺りの警備を担当しているのである。
「おはようございますぅ。今日も一日頑張りましょうねぇ」
「はい、そうですね」
彼女と挨拶を交わして、エントマは少しの間彼女と世間話をするのであった。
「ふふふ、コキュートス様とはどんな様子なのでしょう？」
「コキュートス様ぁ？」
彼女は疑問を抱いた、先ほどからしていたのはこの第5階層にて新たに作られる施設についてであったはずである。それは、この地の特性を利用した保管庫の話であり、そこから急にこの階層の守護者、現在の上司である彼の名前を言われても戸惑うばかりである。
少女は知らない。この階層にて、自分とその武人の間で色めき立った噂が立っている事を。
彼女と別れてからエントマはその日の仕事に取り掛かった。職場は大白球内に用意されて厨房、仕事とは会議における軽食作りであった。今日の議題は中々に重要という事であり、当然、用意する菓子にしたって力を入れる必要があるのである。
（～♪）

思わず、内心で歌ってしまう。それだけに、彼女は調理が好きであった。初めは実験の一環であったという催しで覚えた事であるが、美味しいものを作るという楽しみを知り、色々と改良も加えているのである。
（そうですねぇ）
その会議に出るのは、武人の部下達でも特に腕の立つ者達であり、その殆んどが昆虫系である。ならばと、彼女は空間に手を入れる。
（これの出番ですわぁ）
取り出したのは袋であった、その中には極上の食材が蠢いている。これを使用した菓子は彼らに好評であるのだ。
（う～ん）
量は足りるが、それでも以前よりは減ってしまっている。機会を見て、またあそこに行く必要があるだろうと彼女は調理を進める。
それから、３０分後。
「出来ましたわぁ」
手慣れた作業というものはあっという間である。彼女の前には、人数分の菓子、クッキーであったり、チョコレート、はたまた球状のドーナツ等が並んでいる。
（今回もいい出来ですぅ）
いつか、妹であるあの少女にも振舞ってやりたいと彼女は考えた。勿論、これは彼ら用である為、また別の物を用意する必要があるけど、別に苦とは思わなかった。
（そう考えるとぉ）
休日というのも存外悪くないと彼女は思った。その時間を利用してやりたいことがあるのであるから。そして、彼女は改めて、アインズへの忠誠を誓うのであった。
（どこまでも）
慈悲深い方であり、不敬ながら親のようにも感じる方だ。その御方が休日というものを用意してくれたのであるから、これからも働いていく所存である。それからと彼女は目前の菓子を見て、思った。
（コキュートス様は）

喜んでくれるだろうか、と。
彼女は知らない。自分が何気にかの武人を気にかける事が以前に比べて増えている事に。
「オマエハ――バカナノカ」
「ソノことば、ソックリかえすよ」
会議は予想通り荒れにあれた。その議題は、軍の拡大、その方向性であり、先に発言した人物、アトラスを中心としたグループとそれに言葉を返した人物、ヘラクレスを中心としたグループに意見が割れてしまっているのだ。
「コノキカイニ――シンリンヲ――セイアツスベキダロウ」
「ダカライッテいるでしょう。ソレハアマリニむぼうであると」
「……」
息を吐いたのはコキュートスであった。彼もまた、この会議が長引くことは分かっていたのである。今回の議題と言うのはトブの大森林におけるものであった。
現在、墳墓の支配下にあるのは2種族、リザードマンにトードマンといった者達であった。しかし、森林全体を見まわせば一部に過ぎない。よって、更に進行すべきだと言うのがアトラスを始めとした者達の意見であり、そしてヘラクレスを中心とした者達がそれに反対していると言った構図であった。
「アインズサマノ――ノゾミヲカンガエルナラバ」
このまま進んでいくべきだと言うのが彼らの意見であった。確かにそれは間違ってはいないとエントマも思った。全ての種族を統一した楽園を作る。かといって、優しい手段を取ることは出来ないのであるから。
「ダガねえ」
ヘラクレスは続けた。このまま無暗に戦闘を続けるのはかえって危険であると。
「貴様、怖気づいたか！」
そんな彼を非難したのは進軍派の1人であった。彼は続けた。ナザリックの軍勢、その全戦力を持ってすればこの森林位、制圧は容易

であると。
「ワスレタのかい？」
ヘラクレスの反論はこうであった。この世界の者達は、確かに力は弱い。それでも、狡猾な者達はいるという事。いたずらに戦火を広げれば、それこそ自分達を貶める材料を作りかねないと。
「ソレにね」
彼は続けた。今は、支配下とした2種族を増強していくことを優先すべきであると。
「スマンナ、エントマ」
「コキュートス様？」
会議の最中、武人より声を掛けられて彼女は不思議そうに返した。一体、この方を何を謝っているのかと。
「会議ハマダ続キソウダ」
よって、もうしばらく立ったままでいてもらうかもしれないと言う。現在、彼女は彼の傍で控えている為、そのようになっているのだ。
「別に、気にする事ではありません」
特に苦でもないので、彼女はそう返す。これ位は慣れたものである。
「ソウカ」
どこか申し訳なさそうにしている武人に疑問符を浮かべながら、彼女は思い出す。
（どうしてでしょうかぁ）
それは、以前、リザードマン達との戦争が終わった直後、彼に抱きしめられた事であった。どうして、コキュートスがそう言った事をしたのかは今でも分かっていない。
（ですけどぉ）
別に悪い気はしなかったとも彼女は思うのであった。
それから会議は2時間程続き、結局ヘラクレス達の意見が通ることとなった。自分達はともかく、リザードマンにトードマン達が急速な変化についてこられる保証がないからであった。
それから彼女は第9階層へと来ていた。会議の結果を統括である

彼女に渡すためでもある。
「あら、エントマじゃない」
「ユリ姉様ぁ」
　声をかけて来たのは、姉である戦闘メイドの1人であった。ここで会えるのは偶然ではあるが嬉しくも思う。
「仕事の方はどうなの？　コキュートス様にご迷惑をおかけしていない？」
　この人は会えば、いつもこうである。信頼されていないようにも感じてどうしても心が少し荒れてしまう。
「大丈夫ですぅ」
「そう、なら良いのだけど」と、ここで姉は何か思い出したらしく言葉を続けた。「そうそう、アインズ様が後で執務室に来るようにってお達しよ」
「分かりましたぁ」
　思わず声が弾んでしまう。かの主と関われるのはやはりどこか嬉しいのであるから。
（でも）
　何だろうか？　と彼女は考える。自分の記憶では、確か主は英雄モモンとして、例の警護依頼を終えたばかりであったはずだ。
　少女はまだ知らない。これから自身を待ち受ける運命を、そして、それにより変化する己の在り方を。

墳墓の休日①

ナザリック地下大墳墓。

以前であれば、そこに住まう者達は日々の全てを仕事に費やす。否、彼女達にとっては、そんな軽い言葉でない。至高の御方に仕えるというのは、自らの存在意義であると同時に至上の喜びであるからだ。それは余りにも現実離れした感覚であるが、彼女達が元はゲームのキャラクターであるという点。どういう訳か2次元が3次元になってしまったという突然の出来事とそれらが混ざりあって、出来上がった彼女達の認識。

しかし、それだって以前までの話であり、現在は異なる。今となっては、仕える事が許されている唯一の御方、モモンガ。現在はアインズ・ウール・ゴウンと名乗っているその人物が胸の内を明かしてくれた事で、彼女達は当たり前のように休日という制度を取り始めている。仕える事こそが至高の方々に喜んでもらえると思っていた彼女達は支配者の言葉で気付かされたのだ。

「お前たちはお前たちらしく、自らが思うままに生きて欲しい」

その言葉に従い、それぞれが思うままに休暇を過ごす。それは、かの方に恋慕を抱くナーベラル・ガンマもまた例外ではない。

「……」

彼女は現在、第9階層の通路の一角で立ち尽くしていた。時刻は午前の6時頃であり、それだって、以前までは気にかける事もなかった概念だ。何故なら、本来彼女に睡眠だとか、食事だとかはアイテム等の助けもあり、必要がなかったからだ。その為に、細かい時間を確かめる必要性は皆無であった。しかし、今となってはそうもいかない。働く時間とそれ以外の時間を分ける為だ。故に、彼女は現在が早い時間であると認識している。

隣には妹の一人もおり、その視線を通路へと向けている。感情が読めない無機質な瞳であるが、最近個人的な付き合いが増えている自分には分かる。それは、酷く暗い瞳。例えるなら道端に捨てられたガ

ム。更にそれをやったであろう人物へと向ける冷めたものだ。
その理由だって分かっているし、自分だってそうしたい。何故なら……
「酷いっす～！　ナーちゃんもシーちゃんも冷たいっす～！」
床に寝転がりながら、手足を振っていると、まるで癇癪を起した子供のような事をしているのは、自分達よりもずっと年上であるはずの姉であるから。
「私だけのけ者っすか～！」
「別に、わざと黙っていた訳ではないわ」
彼女は疲れたようにそう言う。しかし、赤毛である彼女の姉は納得していないように続ける。
「嘘っす！　シフトに関してはアルベド様が完璧に管理していたはずっすもん！」
確かに姉の言う通りであった。墳墓所属である者達のスケジュール。もとい就業シフトというものは統括である彼女に、その補佐にして義兄である彼が中心となって作られている。勿論、希望さえ出せば、個人個人にあったシフトだって組んでくれるのだ。だからといって、あまり希望を言う事もしないけど。
そして、ナーベラル。隣にいるシズと、ついでに目前にいるルプスレギナは今日は休日であったのだ。そして、彼女は妹からの願いもあり、これから2人である事をする為に目的地へと向かっていたのであるが、その途中この人物と出会った訳である。
そして、こちらの事情を知るや否や、この有り様だ。彼女にしてみれば、自分だけ外されたと思い、面白くないのだろう。確かに彼女が言ったように墳墓所属の者達のシフト表というのは、2週間に1度全ての者達に配られる。そこに全員のタイムスケジュールが事細かに記入されているのであり、それを確認した妹が今回の事に誘ってくれたのである。
自分は最新のシフト、自分以外の所には殆んど目を通していない。余り他人の在り方を詮索するつもりはないし、それこそ妹のように最低限の確認のみの使用に留めている。そして、それは目前で駄々をこ

ねている姉だって見ているはずなのだ。
　つまり――
（貴方だって碌に目を通していないってことじゃない……）
「……煩い」
「シズ、よしなさい」
　傍らにいた妹が吐き捨てるように言った事を彼女はたしなめる。自分達はメイドであるが、同時に淑女でもあるのだ。と、いうのは長姉の言葉だ。妹の気持ちは分かる。が、だからと言って今の彼女がしている顔は墳墓所属の者としては不適切だと考えての事であった。
「そもそもっすよ～」口を鳥のように尖らせながら起き上がり、体についた埃を払いながら彼女は続ける。「何で２人ともこんな時間に起きているっすか？　少し早すぎやしないっすか？」
　姉が言いたい事は良く分かる。この時間に自分と妹が共にいることを不思議に思っての事だろう。シズに目を向ければ、彼女は首を横に振る。言わないで欲しいという事であった。
「別に大した理由はないわよ。せっかくの休日――自由時間なのだから、それを最大限に活用しようと思っての事よ」
「ふ～ん」姉は、自分の顔――特にこちらの眼球を覗き込むように目を細める。「ほんとっすか～？」
　勿論そんな訳がない。彼女としては、もっと遅い時間にそのイベントを行うつもりであったから。ナーベラルにとって、休日とは愛する主がくだされた大切なものだという認識だ。それに、と彼女は以前聞いた主の言葉を思い出す。
『睡眠、か。今思えばあれだって贅沢な、それでいて素敵なものだったんだな』
　戦士として活動していた時に、主が言っていた言葉だ。といっても、いわゆる独り言であり、特に深い意味はないかもしれない。それでも、主がそう言うのであれば、睡眠だって大切なものなのだろう。よって、現在の彼女はその項目も重視している。
　だからと言って、一日中寝て過ごそうとも思えない。それはそれで、時間が勿体ないような気がする。よって、他にもやろうと思って

いた事もある。
　当初の彼女の予定では、午前８時頃まで睡眠を楽しんで――普段の生活を思えば、それまで寝ているという事自体が特別なのだから。それから、妹との用事を午前中の間に済ませて、昼からは第９階層にある最古図書館で調べものを午後３時までするつもりであった。
　彼女が調べたいと思っているのは、至高の方々がいらした世界の歴史。その中の一つ、安土桃山時代と呼ばれていた時期の頃を特に調べる予定であった。
　と、言うのもそれは彼女の創造主に関係があった。彼女を創った至高の御方はＹＧＧＤＲＡＳＩＬ（ユグドラシル）全盛期の頃、他の至高の方々に「忍者」と呼ばれていたらしく、そしてその存在が最も活躍していた時代がそこだというのであり、ならばと少しでも知りたいと思ってしまう。もう会う事は叶わないのであるから。
（弐式炎雷様）
　せめて、その方が自らの姿をそうした程、思い入れのある世界を知りたいと。
　それからは、菓子作りに裁縫の勉強をするつもりであった。別に深い意味はい。ただ、それを抑えておけば、主の養子たる姉妹との距離だって詰められるはずである。
（～～～!!）
　どうしても頭が熱くなる。やましい事は何一つなく、それは間違いないはずなのだ。それでも、脳は沸騰してしまいそうであり、急いで思考をそらす。
　その間の食事は、墳墓の要所要所に設けられた施設で取る予定であった。ナザリックには元から飲食関連の施設はいくつかあった、食堂にバー等がそれにあたり前者であれば、姉妹で利用する時もあるし、後者に関してはたまに姉たちが友人と飲みに行ったりしているらしい。社会的なお付き合いというものだろう。
（そうよね、姉様は……）
　あの人は種族的な事情もあるが、それ以上にあまり飲食を好まない。だからこそ以前の事には本当に感謝している。

先にあげた2か所は有名であるが、現在の墳墓には他にもそう言った施設が増えつつあった。申請さえすれば、誰でも新しい事を始める事が出来る訳であるし、墳墓の各所には屋台といったものも増えている。その為に食事一つとっても選択肢は多い。

そうやって彼女は今日を過ごすつもりであった。そんな計画が、スケジュールが早まってしまったのはやはり傍にいる妹が原因であった。

今朝の――1時間程前だ。夢心地であった眠りが覚めたのは自身を揺さぶられたからであり、重たい瞼を上げればぼやける視界の中、映ったのはシズであった。

「……何かしら？」自分を見てくる彼女の瞳はいつも通りと言うべきか無機質なものであり、枕元に手を伸ばして時計を引っ張って見て驚いた。「まだ、5時じゃない……本当に何なの？」

目元をこすりながら、不機嫌気味にそう問いかけるナーベラルにシズは彼女らしく一言で返す。

「……映画」

「え？」

「……一緒に見たい」

覚醒していない頭で彼女は妹の言葉の意味を考えて、そして思い当たった。

「ああ、そういう事ね」確かに、墳墓の施設にそんなものが最近追加されたはずであると彼女は思い出しながら続ける。「貴方も休日だったのね……」

「……うん」

普段の忙しさに、姉妹として定期的に集まる機会を設けさせてもらっている為に、そこまで注意深くシフト表に目を通していなかった為に気付かなかった事実。彼女は目をこすりながら重ねて妹へと問いかける。

「貴方の提案は分かったわ。でも、どうしてこんな時間に？」

姉として、優しさ6割、咎める気持ち4割程の声音を心がける。妹のやりたい事であれば、別に反対する気はない。しかし、それと今の

時間帯に自分を起こすのはまた別の問題だ。あまり早すぎるのも常識外れのような気がするし、それよりも不安な事もあった。
「ちゃんと寝ているの？　アインズ様より頂いた貴重な時間なのだから」
「……」
「どうして黙っているの？　怒らないから言ってみなさい」
　しばらく黙っていたシズであったが、姉のその言葉にようやく開く気になったのか視線を彼女から外しながら言う。
「……楽しみだった」
「???」
「……今日」
　ナーベラルは全て理解出来たと同時に激しい脱力感に襲われる。この妹は妹で、今日を楽しみにしていたらしい。特に映画鑑賞には期待値が高かったらしく、それを思って楽しみで眠れなかったという所か。可愛らしいと言えるかもしれないが、それ以上に呆れてしまうと言った気持ちの方が強かった。
（もう少し）
　落ち着いて欲しいと心から願ってしまう。以前までであれば、必要のなかった睡眠を取るようになってしまったことによるストレスかとも一瞬頭をよぎるが、その可能性はないと直ぐに切り捨てる。この妹は、あのどうしようもない姉に、時折訳の分からない事を言ってくる彼女とは違いとても素直で真面目で良い子なのだ。
　彼女が思い当たるはずもないのであるが、もしこれがナザリックではなく現実の世界であれば、唯一言「こんな時間からやっている映画館なんてない」の一言で済ませることが出来るが、ここは何もかも常識外れの大墳墓。所属の者達、支配者たるアインズ・ウール・ゴウンにとっては、臣下であると同時に家族でもある彼女達が望めば、例え丑三つ時であったとしてもありとあらゆる施設が使用可能であるし、稼働だってするだろう。
　別にそれに該当した訳ではないが、ナーベラルはシズの提案を受け入れる事にするのであった。

（いけないわね……）
どうにも自分は、この妹には特に甘くなって来ているようだと彼女は感じていた。もしかしたら、この娘もそれが分かっているからこそ自分の所に来たかもしれない。これは、悪い流れだと理解は出来る。良い子であったシズが自分のせいで我儘三昧になってしまったらと不安が募ってくるが、それも瞬時に、まるで煙が風に巻かれて吹き飛ばされるように直ぐに消えた。
（大丈夫でしょ。シズだから）
それだけ妹に対する信頼もあったと言えるし、普段は無表情な妹が何だかんだで自分にだけ甘えてくれるというのが無意識的に彼女は嬉しかったのである。
「分かったわ。支度をしてくるから、少し待っていなさい」
「……うん。分かった」
そう言う妹の顔はいつもよりほんの少しであるけど輝いており承諾して良かったと彼女に思わせて、その口元を緩ませる。
シズはナーベラルから言われた通りその場で立ったまま待機を始めようとして、それを見かねた彼女が椅子を進めて、自分もまたベッドより起き上がる。シーツというものは、繊細でいくら彼女が丁寧に体を起こしたとしても、簡単に折れ曲がりしわとなってしまう。その事自体は慣れたものであった為に、特に彼女は不快に思うこともなく、手慣れた様子でベッドより2歩ほど離れた位置にある棚へと向かい、そこから一つのスクロールを取り出す。
そして、それを宙に投げ発動させる。瞬時に紙束は火の玉となって消滅する。次に起こったのは、一言で言うなればポルターガイストと何ら変わらない現象であった。
彼女のベッドの品々、シーツに枕にブランケット等が浮き上がり、まるで油をひき十二分に火を通したフライパン。その中に水をいれた時のように激しく回りだし、そして勝手に湿りだしたと思うと、泡に包まれてそのまま約１０秒。その次は、何故か熱気に包まれたようで、あっという間に乾いて行き、最後に生まれ故郷に帰る鮭のように元々の置き所へと納まっていく。そうして出来上がった光景は、正に

未使用のベッドそのものであり、その効果を確認したナーベラルは満足気にほほ笑む。
「デミウルゴス様がお作りになったという生活魔法。すごく便利ね」
「……うん。これで、手間が省ける」
そう、これも墳墓一の知恵者である彼の考案したものであった。掃除に関しては、事ベッドであったり、それぞれの自室となると、個人的な空間ではないかと主に進言したようであり、そして主もその言葉に納得して導入された魔法であった。
（別に私は構わないけれど）
この魔法が入るまでは、この部屋だって一般メイド達が交代で掃除をしてくれていたり、時には自分達で行っていた。この生活魔法の導入以降以前までと同じく彼女達にやってもらうか、あるいは魔法を使用して自分で行うかは各自の判断に任されていた。選択の自由というものだ。
ナーベラル自身としては別に以前のままでも良いかと思っていたが、ここは姉妹で使っている部屋の為に多数決を取る事になり、結果は3対2で彼女達の手を借りるのはもうよそうと言う事になったのだ。
（何か）
やましい事はないだろうかと姉を疑ってみるも、現状特に心当たりはない。目前の妹も出来ることなら一般メイドを部屋に入れたくないと言っていたが、彼女に関してはちゃんと理由は分かっている。実にシズらしい理由（わけ）であり、それを思うとつい頬が緩みそうになる彼女は身支度を始めるのであった。

墳墓の休日②

妹の予期せぬ来訪により己が予定よりも実に3時間も速く起床する事になってしまったナーベラルはベッドの掃除が終わると、寝巻から普段の装いであるメイド服へと着替える。別に他人の目は、同性であり身内である妹のものだったとしても気になる事はなかった。それだけ共に過ごしたからだとも言えるし、なんやかんやで子供だと思っているのも大きいのだろう。とても口には出来ないが。

(ルプスレギナじゃないけど)

自分達は7人姉妹であり、次姉等が特に下の2人を子供扱いするのである。末妹に関しては彼女本来の所属が自分達と異なる為に異変以前は中々会う機会はなく、姉妹でありながらどういった娘であるか分からなかったが、それだって以前までの話である。時間をとって、許可を得て何度か彼女がいる所に行って話をしてみたが、落ち着いた娘であり、下手をすれば姉達よりも大人びた人物だった。

思考があらぬ方向に行ってしまったとナーベラルは目前のシズを一度見る。この妹はとにかく子供扱いを嫌がるのである、そういった行動も度が過ぎれば子供ぽっさに拍車をかける材料になると言うのに。

(でも、困ったわね)

大人のレディと言っても、自分だってそうであるとは言えない。こういった話であれば、やはり長姉にその友人であるメイド長が適任だと思っているので機会を見て、話をしてみるのも良いかもしれない。

そんな事を頭で考えながら、彼女は姿見へと歩を進める。

「シズ、貴方は毎朝ちゃんとしているみたいね」

「……当然、私は大人の女性」

鏡に映るのはいつもの戦闘メイドであるナーベラル・ガンマ……に近いが、まだ完璧とは言い難い。髪が乱れているのである。これもこの世界に来てからの変化らしいと納得している為、次の行動に映る。近くの棚を開いて櫛を取り出して、髪をといて行く。髪にしたってそうしようと思えば、魔法で出来るがこれに関しては長姉が提案したこ

とであった。
『淑女たるもの、髪は自分の手で整えるべきである』
その言葉にならい自分達姉妹は毎朝髪の手入れから入るのである。
彼女は慣れた手つきで自身の髪を結いあげる。肩甲骨辺りまで垂れていた漆黒とも形容できるそれは、やがて普段の彼女の髪型であるポニーテールへと形を変え、愛用している髪留めにホワイトブリムにリボンで仕上げを行い。東洋美人であった寝起きの女性から西洋風メイドへと姿を変える。
最後にもう一度姿見の前で全身を見る。埃に糸くずがついていないか念入りに、それこそ目に力を入れて。姉に言われている事もあるが、常日頃その可能性がない訳ではないから。
(アインズ様……)
愛する主にみっともない姿を見せる訳にはいかないと彼女は更に体を回して全身を見る。その様を妹は目を細めて眺め続けていた。人生初の恋に、想い人とのデートを前にして普段以上に化粧に力を入れる姉をどこか冷めた様子で見ているようでもあった。
それから5分程経過して、ようやく自身の姿に納得したナーベラルと待ち続けていたシズは彼女の寝室を出る。
プレアデス。彼女達姉妹に与えられている部屋というのはかつての至高の方々、彼女達の創造主達が気合を入れたらしく、かなり凝った作りとなっている。まず、第9階層の通路と繋がる出入り口をくぐれば姉妹6人共同で使用する部屋となっており、中央にあるテーブルが出迎えてくれる。
そこから更に6つの部屋へと、それぞれの私室へと繋がっており、それだって寝室と自室と2部屋に分かれている形となっており、統括である彼女が以前は玉座の間で寝泊まりしていた事実を鑑みればかなりの好待遇、否、親(創造主)に恵まれたと言えるだろう。
現在2人が歩いているのはその内の1室、ナーベラルに与えられた自室であり、そこは彼女に彼女の創造主の趣味であふれた空間となっていた。
「……刀、薙刀、手裏剣、クナイ」

部屋を見回したシズの言葉であり、展示物のように並ぶそれらの品を興味深く見た後、前を歩く姉の袖に手を伸ばして掴み、ひっぱる腕に力を入れる。それで、彼女が振り向いてみれば妹の瞳は真っ直ぐに彼女へと向けられており、その意図も直ぐに理解する。

「ええ、弐式炎雷様に、後は私の趣味でもあるわね」

この部屋に置かれているものは、全てが観賞用のレプリカ……という訳ではなく、一応武器として使用出来るが、魔法詠唱者であるナーベラルが使用しようとすれば、相応の時間と鍛錬を要する事となる。

それだけではなくこの場にあるのは、どちらかと言えば見た目を重視したものであり、性能としてもユグドラシルの平均水準を下回る物である為、どちらにしても使いようがないものである事に変わりはないのである。よって、完全に置物となっているのであると姉は妹に説明をする。

「貴方だって、部屋に沢山……」

言いかけた所で、袖にかかる力が強まるのを感じて、見れば妹の顔が膨らんでいる。

「……言葉にしなくても分かっている」

「はいはい、別に恥じる必要はないと思うけど」

自分の趣味であれば、自信を持っても良いと考えてナーベラルはそう言うが、当人としてはそんなのは関係ない。確かに自分の好みであるが、余りそれを周囲には知られたくはない。

（……）

特に次姉等が知れば、笑いのネタにしかならないと分かっているから。そんなシズは必要以上に自室に人をいれない。これは、ソリュシャン等も同様であり、開放的であるのは、ユリ、ルプスレギナ、ナーベラルであり、エントマ等は、進んで尋ねる者がいないと言った具合であった。

それだって、姉妹それぞれで事情があったりする。シズにソリュシャンは自身の趣味を余り知られたくないと言った事情もあるし、ルプスレギナにユリはその辺りを気にしない。と、言うより。

「……ユリ姉の部屋。殺風景」

そう、長女の自室には本当に必要最低限の物しかないのだ。
「そうね、そこが姉様の魅力であるけど」
そう言う姉の顔は笑っており、本当に長女を尊敬しているのだろうと改めて認識させられるし、自分もある程度は同意出来るものであった。
「……ユリ姉、怒ると怖いけど」
「それは、間違った事をした時だけでしょ。姉様が理由もなく拳を振った事が今まであったかしら？」
「……ない」
首を振りながら即答するシズに当然と言わんばかりのナーベラルの態度と同じで姉であっても、妹達から向けられている視線に差がある２人なのであった。
「そう言えば」それから姉妹共同の部屋を歩きながら、思い出したようにナーベラルは言う。「貴方、勝手に私の寝室に入ったのよね」
「……ちゃんとノックはした」
頬肉が引き締まり、目が細められる。少し怒った様子である姉に必死に妹は弁明の言葉を述べる。
「……念入りに１００……１０回はした」
途中で言い換えた事にナーベラルは脱力すると同時に意外に思う。この妹があからさまな嘘を言おうとした事についてだ。
（いえ、シズであれば）
しかし、直ぐに思考を変える。この妹であれば、その気になれば本当に扉を３０秒で１００回ノックできそうであると。
「……でも、ナーベラル出てこなかった。だから」
「もういいわ。済んだことだし、貴方だしね。唯……」一応、これだけは言っておかなくてはならないと彼女は瞬きをしながら続ける。「私だから良いけど、姉様達には」
「……大丈夫」シズは分かっていると頷く。「……ユリ姉に殴られるのは嫌、ルプーの部屋にはそもそも行かない。ソリュシャンは何かされそうだから止めとく」
「そうね、それが良いわよ」

礼儀に煩い姉であれば、どうなるか分かり切ったようなものだ。そして、彼女に関しては確かに何が起こるか自分でも想像できない。そんなに酷い事にはならないはずだが。
「それにしても、本当にシズはルプスが嫌いなのね」
「……別に嫌いではない」
思わず出た言葉に対する妹の返事に面食らったような気分を味わう。普段の態度からこの娘は次姉を嫌っているものだと思っていたから。
「……けど」
「けど？」
「……どうしてルプーが姉なのか時折不思議に思う事はある」
「……そう」
それが今朝、妹と交わした最後の会話であった。そして、改めて目前の景色を認識して見れば映るのは。
「怪しいっすね～？　姉をのけ者にして、２人だけで何をするつもりだったんかすね～」
未だに自分だけ外されたと思って拗ねながらこちらの事を聞いてくる次姉（ルプスレギナ）の姿があり、確かに妹の言う通りであると思ってしまう。
（そうね、どうして）
これが姉なのだろうかと。

墳墓の休日③

「そう言う貴方はどうしてこの時間帯に起きているのかしら？」
未だにこちらに疑惑の目を向け、不機嫌に鼻を鳴らしている姉に向けてナーベラルが発した言葉であった。姉は言ったこんな朝早くに何をしているかと？　ならば気になると言うものだろう。そう言う貴方はどうなのかと？
それだって理由があり、彼女は以前聞いていたのだ。姉妹の中で最も対等で仲が良い彼女が楽し気に言った様子が脳内を駆け巡る。
――ふふ、あれは愉快だったわね。
彼女とこの姉が休日が同じ日だった時のこと、この人物。事もあろうに、午後4時近くまで就寝していたらしく、それによって長女の鉄拳を食らったとの事であった。
――ルプスレギナ！　貴女と言うものは！
――勘弁っす！　ユリね～！
話してくれたソリュシャンでさえ正確に聞き取った訳ではないが、それがその時の姉たちのやり取りであったらしい。それでも、普段の付き合いもとより姉妹の絆とも言うべきか、容易に想像できてしまうのだ。
「ちょっとナーちゃん？　何すかその顔は？」
「何でもないわよ」
思わず顔に出ていたらしく、姉に咎められ咄嗟に否定しています。
「嘘っす。完璧に冷めた表情をしていたっす」姉は一度、手で自身の目元をこすり続ける。その目には心なしか涙が溢れているようであった。「そんなに頼りないっすか……私は？」
「ちょっと、何も泣く事ないでしょ」
こんな姉は初めて見ると、ナーベラルは内心焦る。彼女の目からみて、姉ルプスレギナとはいつも飄々と言うべきか、どこか余裕を持った人物でもあった。少なくとも鋼の精神力がなければ、長姉（ユリ）の鉄拳を受け続ける事は不可能である。
（いえ）

あるいは単にこの人物がそれだけ阿保なのだという事なのかもしれないけれど、と考えて直ぐに思考を切り替える。そんな姉だからこそこんな姿を見せられてしまい、戸惑ってしまったらしい。先刻、直ぐ傍にいる妹に問いかけた内容と被るが、自分だって別にこの人の事を嫌っている訳ではない。

（……）

それを考えて、ナーベラルは内心蒸発しそうに感じる。が、それを表に出さないように必死に体中の筋肉に、ありったけの精神力をフル稼働して取り繕い、何とか宥めの言葉を出そうとする。そのタイミングで、袖を引っ張られる。今の状況でそれが出来る人物は1人しかいない。

「どうしたのシズ？」

眼球のみを動かしてやや後ろに立っていた妹へと声をかける。その表情はいつもと変わりないものであるが、少しばかしの怒りを内包しているようにも見えた。

「……」

「？　本当にどうしたの」

「……ナーベラルは詐欺師に注意するべき」

「はい？」

何故、ここでその単語が出るのであろうかと不意を突かれた気分を味わう。

詐欺師――

それが、他者を謀り己に益をもたらす輩であるというのも。そして、至高の41人の内、何人かが被害にあったらしいという事も耳にしている。蘇るは栄光たる話声。

――いや～参りましたよ。

――ほんとほんと、あれは詐欺だよな～。

（偉大なる方々を騙すとは）

その相手に殺意を通り越した感情が爆発しそうになるが、それももう出来ない事だ。全ては向こうの世界の話であるから。彼女は名残惜しく感じながら、その思考も捨て去り、意識を妹へと向ける。気に

すべきはどうして、このタイミングでその話題が出るかだ。
　そんな姉の心情を察してか、シズは一度息を吐く。俗に言うため息というものであるが彼女がするのは、本当に珍しいと言えた。本人は全く自覚していないが、ファンである一般メイド達が今の彼女の動作を見れば昇天ものでもあると言える。
（……ナーベラルは人が良すぎる）
　次姉が少しいじけた位でしおらしくなってしまう姉の事を誇りに思う反面、ほんの少しであるが面白くもないと感じてしまうのだ。無論それだけではない。自分は知っている。目前の愚姉（ルプスレギナ）が今更こんな事で気を悪くするはずがないのだ。
　なのに、現在最も親しく感じている姉はまんまと騙されている。優しいのは良い事だ。出来る事ならこの先もずっと自分を甘やかして欲しいと思える。目前の姉は論外であるし、長姉にはそう言った事は頼みにくい。もう1人の姉にもなんだか頼みにくい。悪い人物ではないが、どうにも趣向が合わないようなのだ。
　ともあれと、彼女は敬愛する姉を謀るどうしようもない姉の悪ふざけを砕くべき。未だに泣きまねをしている様子の奴を睨みつけて言葉にする。
「……ルプスレギナも猿芝居はそこまでにするべき」
「え？」
　思わずナーベラルは声を上げる。芝居？　妹の目はいつになく真剣であり冗談とかの類では……
（違うわね）
　そもそもシズは自分から積極的に発言をする事自体が稀であり、冗談に嘘等とはほぼほぼ無縁の存在と言える。仮にそんな事をしてもこの娘にとっては損しかないしそもそもそんなキャラでもない。
　ではと、正面にいる姉を見れば。
「てへ、流石シーちゃんは鋭いっすね♪」
　片目を閉じて舌を出して笑っているではないか。やっている本人にしてみればお茶目のつもりなのかもしれないが、自分としては怒りが湧くだけである。

「ルプス？」
「おっと、そんな顔しないで欲しいっすよ。ちょっとしたお遊びじゃないっすか」
　ケラケラと笑いだし、やった事を悪いとはちっとも思っていないようでありむしろこの後もどうやって自分をからかってやろうかと思案している顔であり、改めてナーベラルはため息を吐く。怒る気力すら湧かないのだ。
「貴方って、本当にどうしようもない人ね……確かに姉である事が疑問に感じるわ」
　せめて嫌味を言ってやろうと出たのがそれであった。今朝シズと交わしたやり取りも決して無関係ではあるまい。
「ちょっと！　何すかそれは！」
　流石の姉も今の言葉には精神的に効くものがあったらしい。どの辺りがそうであったかは検討もつかないが。
「酷いっす……姉として疑問？　こんなに優しいお姉ちゃんなのにっす……」
　再び、両手を顔にあてざめざめと泣き出す姉に妹は容赦なく言い放つ。
「……よく絶えずに涙を流す事が出来る。そこだけは感心する」
「酷いっすぅぅ！」
　未だ……と言うより始めから妹が姉に向けている視線は冷たいもの。ナーベラルは何を口にして良いか分からず。考える事も嫌になりしばらく傍観しようと天井へと視線を向けようとしたが、次いでルプスレギナが発した言葉には反応せざるを得なかった。
「それに何すか……さっきのナーちゃんの口ぶり、嫌味の言い方がユリ姉みたいになってきてるっす……」
「え？　それは……」
　再び思わず声を上げてしまい、顔の筋肉が弛緩しそうになる。それをなんとか抑える、が。
「……ナーベラル。らしくない顔をしている」
　妹が向ける視線は呆れたものであった。表情自体はいつもと変わ

らないのに自分にはそう見えてしまうのであった。同時にこの娘の優しさに感謝もする。シズは今現在姉に向けているように、きつい時はきついのだ。

『気持ち悪い』

と、言う事だって時にはあるのだ。もしもこの娘に、あるいは他の妹達にそんな事を言われてしまえば自分は即座に喉元にナイフを突き刺すだろう。

「あら、そう？」

外聞というものを一時彼方に捨て去り、手を頬にあてて見れば口角が上がっているのが嫌でも分かってしまう。

「……ナーベラル。ユリ姉の事となると嬉しそう」

「本当なんなんすか……同じお姉ちゃんなのに、この差は」

そんな戦闘姉妹3女の姿に次女も4女もその方向性は違えど、面白くなさそうに顔をしかめる。彼女がその緩みきった顔を元に戻すのに3分ほどかけ、その間ルプスレギナは口をすぼめ、シズは奥歯を噛みしめていた。

赤毛の人狼メイド（ルプスレギナ・ベータ）

人生、否人狼生においてこれ程の喜びを得られる機会はもうない。そう私は確信している。

「うう、ソリュシャン……ナーベラル。２人とも良かったわね」

それは、隣に立っている姉も同様のようであり、とめどなく流れる涙を手にもったハンカチですくっている。普段の彼女を知っている者であれば、目を丸くすることは間違いようのない姿。一般メイドにカルネ村を始めとした人達の目もある為に、宥めにかかるべくその肩に手を置く。

「もう、泣きすぎっすよユリ姉」

「だって……本当によかった、て私は思っているし……グスっ！」

姉の気持ちは分かる。というか私だって出来る事なら大声を上げて泣きたい。今日という日ならば、それ位は許されるかもしれない。

（駄目よ、気を抜いたら）

少しでも肩の力を抜けば、涙腺が緩んで姉につられて私も泣きそうになってしまう。そう、妹達を思えば、と。

「姉様もルプスレギナも大袈裟過ぎます」

周りが一層騒がしくなる。それも当然ね、今日の主役の１人が来たのだから。

「……ナーちゃん」私は唯、震えそうになる口元にいつもの数百倍の力を込めてそう答える、が。「うう、もう……ユリ姉のせいっすよ……わああ！」駄目だった。目頭が熱くなって、頬を沢山の涙が滑る。呼吸が苦しい。もしかしなくても鼻水も出ている事であろう。普通の女の子であれば体裁を気にするだろうが、私はそういった事には疎い。そんな私でも何とかそれらを抑えようとするのであるから自分でも驚いている。

だって、そうじゃない。今日は大切な日なのだから。

「本当にもう……でも、ありがとう。そんなに喜んでくれて、とっても嬉しい」

そう笑う妹はいつものメイド服ではなく、白無垢と呼ばれる衣装を

身に纏っており、普段ならば決してしない紅を口に薄く塗っており、黒髪である彼女の美貌を更に引き上げている。
「あらあら、姉さん達は号泣中？　ふふ、そんなに喜んでもらえるならば私も嬉しいですわ」
　口元に手を当てながら、もう1人の3女がこちらへと歩いてくる。彼女もまた普段とは異なる装い。端的に言えば、ウエディングドレス。それも唯の者ではなく彼女に合うように改造が施されている。まず目を引くのはスカートの部分だ。ウエディングドレスと言えば、地面にする程の長さが一般的であるが、彼女の場合は太ももの辺りまで短く整えてあり、露出が激しいのは何も足に太ももだけではなく、上半身も同様であり、胸元から腰回りまでの部分しか彼女を包んでおらず、肩に鎖骨等は衆目に晒されている。
　そして一番のポイントはその色合いだ。私は至高の方々の世界ではどうあったなんて全く知らないけれど、かの世界におけるドレスの色は純白と決まっているらしい。が、今妹が身に纏っているのはその逆、今回彼女の伴侶となるあの方のパーソナルカラーの1つとも言える漆黒色。何故か私もソリュシャンには白よりも黒が似合うと思っていたから、他の人達などはその比ではないでしょうね。
　実際、ここまで着飾った妹達はより一層人目につく。
　憧憬、祝福と言ったものが大半を占めているけど、それに交じって欲情も交じっているわね。本当にほんの少しだけど……まったく、誰かしら？　もしも、この娘達に手を出すつもりなら冗談抜きで殺してやるんだから。
　この娘達に触れていいのは、世界で唯御一人あの方だけなんだから。
　目の前にいる妹達――涙で半分ぼやけてしまっているけど――を見れば、彼女達だって今にも泣きそうな顔をしている。目じりにはティースプーン一杯程の液体。それは、一体何の水っすか？　て聞くのは野暮ね。
　私は知っている。この娘達がどれだけあの方を想って来たか……本来の立場であれば、決して叶う事のない夢。

本当にあれから色々な事があったものよ。
私、ルプスレギナは心より喜んでいる妹達の姿に改めて胸に誓う。この先、例えこの娘達の創造主が現れてこの娘達を連れ去ろうとするのなら。（無論、偉大なる至高の方々がそうするとは思えないし、あくまで最悪の仮定ね）例え、創造主でも斬る。と、回復係（ヒーラー）の私が何を言ってるのかと話になるっすよね～♪　あはは。
「……ユリ姉……ルプー」
「ナーベラル姉様に、ソリュシャン姉様もご一緒ですかぁ～」
「皆さんお揃いなのですね」
新たに、というより残りの姉妹達も来たわね……というか、シーちゃん！　何でユリ姉と私を呼ぶのにそんなに間があるんすか!?
おかしいっすね～。最近怒らせる事したっすかね～。シーちゃんのお気に入りの人形に落書きした事なら謝ったし、シーちゃんが好きなチョコレートシェーキも奢ったからノーカンのはずっすよ？　まあ、気にしても仕方ないっすね！
来たのは姉妹でも下の方にいる3人。勿論、3人とも今日は特別な衣装よ。記念すべき日なのだから当然よね。
シズが着ているのは簡素なドレス。唯でさえ人形みたいな女の子なのに、すっかり着せ替え人形ね。
エントマが着ているのは民族衣装。確か、ラスカレイドに着付けて貰っていたかしら？
オーレオールが着ているのは、これまた真っ黒な着物。喪服とも言うらしいけど、やっぱり詳しい事はよく分からないのよね。
シズが泣いている私達を見て呆れたように言う。
「……ユリ姉、ルプー。泣きすぎ」
うるさいっすよ。ぐす、そういうシーちゃんだって、今にも泣き出しそうな顔をしているっすよ。ま、他の人達にはいつもと変わらないように見えていそうっすけど。それは、エンちゃんにしてもオーちゃんにしても同じようっすね。
そして、この妹達が抱いている感情は姉（私達）とは違うもの。嬉しさもあ

るけど、寂しさも交じっていると言った所。無理はないわね、姉が結婚する。それも想い人と。それ自体は喜ばしいことだろうが、同時に大好きな姉が離れてしまうのが。
（ほんと、しょうがないわね）
特にシーちゃんなんて、ここ最近の休日ではずっとナーちゃんにベッタリだったすからね～。同じようにエンちゃんはソーちゃんに、オーちゃんはユリ姉に……あれ？　私は？　何か急に悲しくなってきたっすね～。
「シズ、エントマ、オーレオール。貴方他もその恰好似合っているわよ」
ナーベラルが微笑んでそう言えば、妹達も泣きそうになる。特にシズは手先が震え、利き足が前へと倒れようとしている。
（駄目よ、シズ。我慢なさい）
ここでナーベラルに抱き着けば、折角の衣装が乱れてしまう。姉が自分だけの姉でなくなってしまうという心細さは理解する。でも、今日この日だけは駄目だ。シズはその辺りをしっかりと理解しているみたいで、手に持った花束をナーベラルへと差し出す。それと同じタイミングでエントマも同様にソリュシャンへと腕を伸ばす。
「……ナーベラル」
「ソリュシャン姉様」
「……おめでとう」「おめでとうございますぅ」
妹達の気持ちを本日の主役格である妹達は薄く微笑みながら受け取る。うう、やっぱり感動的な場面ね。
（!!）
不意に頭痛が襲う。まるで、頭が割れそうだ。今日という日にどうして……

そしてルプスレギナは目覚めた。場所は現在仕えている姉妹の家、今は亡きその両親が使用していたという寝室。視界は上下逆転しており、それで全てを理解した。

「あちゃ～。またやっちゃったすね～」

未だに痛む頭をさすりながら、彼女は身を起こす。こんな所、姉に見られれば間違いなく折檻ものだ。彼女は自慢ではないが寝相は良い方ではない。むしろ、最悪に近い部類であった。それこそ自慢できることではないがこれまで暮らしてきた墳墓の自室ではベッドはおろか、布団を敷いて寝た事すらない。雑魚寝こそ至高だと思っている。無論姉が黙っている訳なく何度となく小言を言われもしたが、その都度いかに雑魚寝が健康的なのか、出鱈目交じりで説明したものである。

ルプスレギナは分かっていない。その場しのぎの嘘がバレた時にどうなるか、しかし彼女は気にしない今が楽しければそれで良いのだ。

そんな訳で彼女の寝相と言うのは相当悪く、このベッドで眠るようになってからは毎朝転げ落ちて頭を床に打ち付けて起きるのがもう一つの日課のようなものであった。

「んじゃ、起きるとしますっか♪」

頭痛などものともせずに彼女は立ち上がる。まあ、彼女の場合は殴

られ慣れているというのが一番であろうが。
「にしてもっすね～」ルプスレギナは一度自分の格好を見て、次いで胸の辺りを撫でる。「やっぱりチクチクするんすよね～」
漏れるのは不満。彼女は墳墓所属の者達の中でも特に感覚が鋭い方であるが、それは触覚にしてもそうであり、早い話が彼女の肌は常人の何百倍も敏感であるのだ。その為に、服を着るだけでも多少むずがゆい思いをするのだ。
だからこそ、寝る時くらいは何も身に付けないで寝るのがルプスレギナにとっての常であった。
しかし、その認識もここに移る時に変えざるをえなかった。もしかしたら、墳墓の知恵者たちはここまで見越して自分にこの仕事を任せたのであろうかと、彼女は一瞬考える。
（いや、アルベド様達が知るはずないっす。あるとしたら……）
姉が告げ口（一般的には唯の報告である）したという事であろうか。いや、それしかあるまい。そもそも自分の寝室に来るのは姉だけであるから。
（何故かみんな来ないんっすよね～）
別に散らかっている訳でもないと言うのにどうしてだろうか？
と、首を傾げるもそれも一瞬で彼女は思考を切り替える。
（ひとまず、腹いせ晴らしにユリ姉がＢＬ本を隠し持っているという噂を流してやるっす！）
「にししし～♪」
これでまた墳墓が湧くなと彼女は後々シャレにならない悪巧みをしながら、着替え始める。と、言っても魔法が使える彼女のそれは目まぐるしくモデルが変わるファッションショーの如くあっというまだ。
「ほいっす」
と、指を鳴らせば肌の上から直接着ていた（彼女なりの妥協点）てるてる坊主を思わせる服が瞬時にいつもの改造メイド服へと変わり、枝毛くせ毛だらけの髪もいつもの三つ編みとなり彼女のトレードマークである帽子が被さる。

「さて、とすね」
　自身の魔法に絶対の自信と信頼を置いている彼女はいちいち姿見で確認等しない。彼女がまずするのは右腕にはめた腕時計を見る事だ。
　時刻は朝の４時１５分頃。いつも通りであれば、あと４０～５０分で現在の主である少女が目を覚ますであろう。その前にやっておかなければならない事もある。彼女は静かにそれでいて優雅に寝室を出て、そのまま玄関をくぐるのであった。

「おや、これはルプスレギナさんではないですか。おはようございます」
「おはようっす！」片手を上げながら陽気に返す。
「ルプスレギナさん。おはようございます」
「これは、ご丁寧にどうも。おはようございます」一度営業スマイルをかまして手を胸の前で重ねて頭を下げる。
　彼女は現在の自分の勤め場所であるカルネ村を歩きながら、すれ違う人々に様々な挨拶を気まぐれに交わしながら目的地を目指す。そしてそこに着いた時、彼女は滅多に見せない程に凛々しい顔つきをする。否、そうなったと言うべきか。
「おはようございます。エモット様」
　そして、彼女は掃除を始める。と、言っても簡単な掃き掃除に墓標替わりである板にニスを塗る位しかやる事はないのだが。
　それらが一通り終わると彼女は再び姉妹の両親を前に手を合わせる。
「今日は穏やかな晴れでございます。お嬢様達におかれましては……」
　次に彼女がやるのは姉妹に関する報告だ。姉妹揃って畑仕事の傍ら勉学に励んでいる等、そんな些細な事であるが、目前にいる彼らにとっては大切な事であろうと。
　そうやって、しばらく姉妹の両親と語らい合いながら彼女は時間を過ごして、頃合いと思われる所で腕の時計を確認する。

「そろそろ戻って朝食の用意をしなくてはね」そして、再び前を向いて彼女は頭を下げる。彼女の姉等がみれば『普段からそうして欲しい』という事間違いなしの姿である。「では、エモット様。私はこれで失礼します。また明日来ますね」

最後に笑いかけて彼女はその場を後にする。別にこれは、命じられた訳ではなく彼女が自主的に行っている事であった。例え、養父がいるといっても子にとって親は大切な存在だ。そして、自分はその子供達に仕えている身であるのだから。これ位は従者の勤めであるのだから。

こうして、彼女の従者としての一日が始まるのであった。